

との意。

は

はい 五臓の内にも肺は金(反魂香)

【肺】肺臓。腹中にある五種の内臓を五行に配して、肝は木、心は火、脾は土、肺は金、腎は水とする。

はい まだ市五郎三藏が船は見えいろ、心元なかげい(博多) 門出よ

かよか、よか便開かうばい(博多) 思ひきめた意をいふ長崎國訛の感動詞である。この語現今も用ひられ「間もなく日が暮れるから歸りますよ」といふことを、かの地方では「もう日もくるるけんきやあろうは」といひ、「宜し」ときまつた意に「よかばい」とよぶ。

はい 敵に赴く兵の枚を衝んで進むといひし古人の詞(稍變入道平正犬)

【枚】形したもので、兩端に小さい紐が附いてゐる。軍士これを衝んで紐を頭後に懸き、以て言語を發するを禁するのである。金銀を鳴らすを見よ。

はいかい 栗毛たちまち泥附毛、はいかい 鞍も鎮まらず(女殺)

【泥】文馬の跳躍するをいふ。李尤に「天馬沛艾、驚尾布分」、源平盛衰記卷二十八、宗盛補三大臣の條に「馬沛艾して、春日大宮にて高くあがりて走廻りければ」。

はいくわ 油の梅花剃刀も匂を惜む額際(雪女五枚羽子板) 色香揉込む

梅花の油(女殺) 燈油二升梅花一

合女殺 ふと室の津へ出かけ梅花のうつりをかきそめて、(女捕)

【梅花】梅花油の略。蠟 胡麻油などを交へ、梅花(龍腦、麝香、丁子などの混合物)を加へて練り、女が頭髪に塗る香油の名である。梅花の配製法は、女用訓蒙圖卷五、布袋の方梅花の條に委しう載せてある。

*はいしよ まつ菅承相をこれへ召せよ、衣冠を剃ぎ直に配所へ送るべし(天神記) 罪なくして配所の月を見んといふ古人(薨門松(兼好))

【配所】配流された地。謂ふ。「罪なくして配所云云」はその條を見よ。

*はいいた さてさて知れたるげいいためら、おのれば正しく曾我兄弟が思ひもの虎が懸 懷妊なればとて夜な夜なかける男の數、どれがどれやら何のその夫に覚えのあるものか、言ひすて歸れば海野太郎、ヤイヤイはいため待ち居らう(百日曾我 あのばいた髪の毛抜き(女夫也))

【女】賣春婦。書字考用集人倫門にも、藤麻柳北元編「藥菜にも(賣女)」「パイタ」と振假名を附けてある。蓋し挿入の體詞であらう。

*はいだて 上帯草摺はいだてにむらすむんすと取附いたり(兼好) 草摺つかんではいだて搔上げ(源經親)

【草摺】腰に着ける帯と和漢二字國會、卷二十、兵器に「腰摺所」著陸經、有三板腰摺踏込腰摺伊豫腰摺越中腰摺等、大抵摺之體性、而騎士善之最佳、如三歩卒不用、腰摺呼一節曰「掛」。

*はいとくさん 此年まで敗毒散一

【一節】「掛」を見よ。

服飲まぬこの親仁ゆすりはたべぬ(女腹切) 何某は暑や寒やの風の神、手療治の生薑酒。敗毒散に追出され(振袖始)

【敗毒散】漢方藥の名。風邪の藥である。もと支那で製した藥であるが、我國にてもその法を傳へてこれを製したが、明劉宗厚編「玉機微義」(救急水五年の刊本もある)卷五、雜方條に、「良方治疫癘癘敗毒散多加入麥、甘草、陳皮、姜、煎服」。

*はいにんどもん ええ淺ましや、賣人土民の子にてさへ七歳八歳より東西を辨へて、物の道理は知るぞかし(雜曲) 生きとし生ける者命惜まぬものやある、其一命を義につて捨つるを弓取武士と名付け、惜むを賣人土民といふ(堀山堤)

【賣人土民】商人野夫の輩は武士のやうには義理を辨へぬ者とされてゐたのである。

はいぶき 「はひぶき」を見よ。

*はいまう どうぞ助けて助けてと騒げば夫も敗亡し(天網島) なほも續けて打つ石は、提灯も打破れ由兵衛も敗亡し今宵 これこれ徳兵衛殿、我女房に隠るるとは何事と、聲かけられて夫も敗亡し(女殺)

【敗亡】 失敗。閉口。窮すること。

はいよせ 「はひよせ」を見よ。

*はいろく 使者員勒王謹んで、韃靼國と大明國古より威を勵み(國性逸)

【員勒滿洲語】Dingであつて、清朝では郡王の次の爵號。

枚を衝む 「ばい」を見よ。

*はいんど 雑色はいんど口口にだまりませ静まりませと制すれども頼光親子は見やり給はず(弘敷殿)

【単人】頼光の猛勇な人義。大隅薩摩國人の稱である。この國人朝廷に召されて仕へ、永く留りて京の人となれども、子孫までもは若年人と稱しての職に仕へた。雑色の輩で下官の者である。

はうおんかう 「ほうおんかう」を見よ。

*はうかぞう いかにか面、はうかぞうは何れの祖師禪法を御傳へ候ぞ(用文章)

【放下僧】剃髮ささら等の禪子を用ひ、歌舞經業等品などを業とするものをいふ。人倫訓蒙綱要(元祿三年刊)卷七に「放下は字訓の意はななくだす也、禪家に於て諸惑を打捨つるを放下するといふ其心也、たとへば鳥の上に立物をし、枕を重ねて自由につかひ、山の芋を離し、枕を重く置かれ變化不思議の體をなすこと、萬事の當體を放下して物にとこほりなき體にしなす故に放下といふ也、あや指金輪つかひ皆放下なり」。

はうきばう 四國は大山伯者坊、飯綱の三郎、富士太郎(十二巻)

【伯者坊】伯者大山に據む天狗の名。謡曲。飯綱天狗に「四州には白衆の相撲坊、大山の伯者坊、飯綱の三郎、富士太郎」とあるに據つたものであるが、四州は四國のことであるから、この語であるのに、菓林子これを四國(大山伯者坊)といつては誤と見る可い外ない。

はうきやう 御法もかいびやくの、はうきやうの聲告げ渡る (釋迦)

【方響】佛堂に用ゐる樂器である。箋注後名類聚抄、調度部音樂具に「方響。律書樂圖云、

尋の苦定反、俗云方尋、警音強、○那波本住、方尋俗云強六字、按方尋出西大寺資財帳、及延曆十五年紀、見類聚國史音樂部、方尋の名は西土書「無見、疑是方尋之誤」。菓林子の此文、「はうげい」正しくは「はうきや」となつてゐる本もある。按ずるに「はうきやうしあるは誤であらう「はうげい」を見よ。

***はうぐわん** 楠河内の判官(女稱)
判官最良の世の中、お前の名ほか出ませぬ(晋庚申)
〔判官〕檢非違使尉の異稱である。貞史雜記に「檢非違使尉を判官と云ふときは、はうぐわんと云ふ也。」「判官最良」とは源九郎判官義經に喩ふることをいふ。謡曲・淨瑠璃などに義經のことをいへるは皆彼に同情の筆をむけてゐるので、世人も義經に同情する者が多い。心中宵庚申のこの文は、姑が嫁を去らせたあとつては、世人が義經に喩ふるそのれりやうに、その理由はともあれ直に縁に同情するとの意。

はうけい 「はうきやう」「はうげい」を見よ。
はうけふいんだらに
「はうけふいんだらに」を見よ。

はうじ 臨邛のほうじが末葉諸國を勸進す(國性詠合歌)
〔方士〕方術の士。仙術を行ふ人。道士。「りんきやうし」を見よ。

はうじちよく日 今日ばはうじちよく日、追付で大風起らん(唐船歌)
〔昴日〕昴直日「昴は二十八宿の一。月が天球を一周するには二十八日未滿を要する所から二十八宿を順次に日に當て一昴に當る日。昴は和名「すばる」又は「むつらばし」。六連星)といひ、牡牛座のb.e.d.n.f.f.h及び他の一星も成り、七つの星の聚である、古く

は火神と稱した。東京附近では一二月頃日暮頃に天頂の附近に見える、肉眼で見えるのは上述の七つの星であるが、望遠鏡で見れば六百箇程の星群である。隨直日も處上の語で、隨直に當る日は大風起ることがあるとされてゐる。

はうじやう 「はうじや」を見よ。
はうじやう 放生第一の靈水にて、捨身思ひも寄らずとあれば(鰻丸)
二七日は放生供(鰻丸) 家來自慢の階上ならば、祇園會か放生會の御興の供せい(關八州驚馬)

〔放生〕既に捕はれて殺さるべき魚鳥などの生類を助けて放ちやること。これをなすに法を修し供養するを放生供といふ。「放生第一の靈水」とは、關の清水は生類の命を助ける靈水の意。
〔放生會〕とは、陰曆八月十五日八幡社祭日に魚鳥を放つ會式をいふ。石清水八幡社の放生會は、神宮社僧・樂人文武の官人尊盛遊して行列をなし、神輿出でて盛大を極めたもので、詳しくは黒川道徳撰の日記紀事八月十五日の條にも載せてある。

***はうじやくぶじ** 旁若無人の繼父(せせ)眼(女腹切)
〔旁若無人〕笑ひに人無き狀。儼然手の振舞をなすこと。史記・刺客傳に「高漸離擊筑、荆軻和而歌於市中相樂也、已而相泣、旁若無人者」。

はうじよ 「はうじよ」を見よ。
はうじよ 萬事を夢と飲みあげし、寐寤提重五升樽、坊主持して北うづむ(女殺)

〔坊主持〕道連れの友達相約して、坊主に出發ふまで左邊の手荷物を持ち歩き、坊主に出發へば次の番の者に渡す、かく坊主に行き違ふ毎に代るべし。俳諧集覽に「坊主持、途中に道連れの特物などを順持に、坊主に行かひたるごとに代るを云ふ。」

***はうすん** 天機を安んじ奉らんは、百合若が方寸胸の間に候(百合若)
〔方寸〕心をいふ。列子に「吾見子之心、奕方寸之地處矣。幾聖人也。」

はうた 松にばうたのしらべては、風も調子や替へぬらん(尖齋處) 役者物眞似納屋はうた、二階座敷の三味線にひかれて立寄る客もあり(笑細線)

〔端唄〕近世俗謡の名稱、破唄の義、當世やらの曲節で端唄の意である。松の葉(元禄十六年刊)卷之三に端唄を本調子、二上り、三下り、騒ぎ唄の四種に別けて擧げてある中には、長明よりも長い端唄が少からずある。なやばうたはその條を見よ。

はうたたり 今年ば爰が金神に當つた、それでこれはう崇り(大經師)
〔方崇〕方角崇り。方角が凶なる爲に祟を受けること。金神の方角に對して物事をなすは、金神向(方崇)と不吉なりとし、その方角を避けて物事をなすを金神避といふ。西鶴撰繪留卷四、家主殿の祟はしらの條に「此家鬼門角なる事を氣にかけ、殊更當年の金神にあたるといへば、此末世に何の方崇り、こちへまかせ給へ、無理に移らせしに」。菓林子の此文は、類符を撰られたたので、類崇を金神の方崇にひひけた洒落である。

***はうぢやう** 方丈に案内す、住僧立出で對面ある(會釋出) さればこの方丈の狀をしつらふ事餘の儀にあらず(最明寺殿)

〔方丈〕寺院の長老住持の居室をいふ。方丈はもと維摩居士の石室方一丈であつたのに基くといふ。祖庭事苑に「今以禪林正體爲方丈。蓋取則毗耶離城維摩之室、以二丈之室能容三萬二千師子之座、有不可思議之妙事、故也。」

はうぢやく 「はうぢやく」を見よ。
はうぢやく 女を乗せたる船中を見るも大かた方圖がない(博多) 見れば方圖がない(博多) 〔方圖〕畫圖引きから出た語。陰限。きまり。

はうとうはん には
〔摩訶訶若〕も若人のすはらみつ云云)を見よ。

***はうびき** 節の下では三味彈き、梯子の陰では寶引(壽門松) はうびき骨牌をうつつら王子が八千歳(雪女)

〔寶引〕室町時代頃では紫に金鑲を括つてこれを引當てしめる遊戯であつた。江戸時代になつては、諸種を幾筋も集めて一つに括り、その中の一筋に樽を置き駒廻りなる者これを隠して握り、その樽を賣ける諸種を引當てる者を勝となし賭物を得るのである。これは普通どのやり方であるが、この法を應用して黒付きの色色のこととしたものである。本朝町人鑑卷之三に「さる大方方に御吉例と正月三日の夜、大書院にて家久しき番はかり召寄せられ寶引を仰付けられけり。ふすま障子の内より五色の長緒を數百筋放出して、手毎に一筋づつ引

〔觀所(判額和天)びそあ季四久長和天)を引當てしめる遊戯であつた。江戸時代になつては、諸種を幾筋も集めて一つに括り、その中の一筋に樽を置き駒廻りなる者これを隠して握り、その樽を賣ける諸種を引當てる者を勝となし賭物を得るのである。これは普通どのやり方であるが、この法を應用して黒付きの色色のこととしたものである。本朝町人鑑卷之三に「さる大方方に御吉例と正月三日の夜、大書院にて家久しき番はかり召寄せられ寶引を仰付けられけり。ふすま障子の内より五色の長緒を數百筋放出して、手毎に一筋づつ引

〔觀所(判額和天)びそあ季四久長和天)を引當てしめる遊戯であつた。江戸時代になつては、諸種を幾筋も集めて一つに括り、その中の一筋に樽を置き駒廻りなる者これを隠して握り、その樽を賣ける諸種を引當てる者を勝となし賭物を得るのである。これは普通どのやり方であるが、この法を應用して黒付きの色色のこととしたものである。本朝町人鑑卷之三に「さる大方方に御吉例と正月三日の夜、大書院にて家久しき番はかり召寄せられ寶引を仰付けられけり。ふすま障子の内より五色の長緒を數百筋放出して、手毎に一筋づつ引

〔觀所(判額和天)びそあ季四久長和天)を引當てしめる遊戯であつた。江戸時代になつては、諸種を幾筋も集めて一つに括り、その中の一筋に樽を置き駒廻りなる者これを隠して握り、その樽を賣ける諸種を引當てる者を勝となし賭物を得るのである。これは普通どのやり方であるが、この法を應用して黒付きの色色のこととしたものである。本朝町人鑑卷之三に「さる大方方に御吉例と正月三日の夜、大書院にて家久しき番はかり召寄せられ寶引を仰付けられけり。ふすま障子の内より五色の長緒を數百筋放出して、手毎に一筋づつ引

〔觀所(判額和天)びそあ季四久長和天)を引當てしめる遊戯であつた。江戸時代になつては、諸種を幾筋も集めて一つに括り、その中の一筋に樽を置き駒廻りなる者これを隠して握り、その樽を賣ける諸種を引當てる者を勝となし賭物を得るのである。これは普通どのやり方であるが、この法を應用して黒付きの色色のこととしたものである。本朝町人鑑卷之三に「さる大方方に御吉例と正月三日の夜、大書院にて家久しき番はかり召寄せられ寶引を仰付けられけり。ふすま障子の内より五色の長緒を數百筋放出して、手毎に一筋づつ引

〔觀所(判額和天)びそあ季四久長和天)を引當てしめる遊戯であつた。江戸時代になつては、諸種を幾筋も集めて一つに括り、その中の一筋に樽を置き駒廻りなる者これを隠して握り、その樽を賣ける諸種を引當てる者を勝となし賭物を得るのである。これは普通どのやり方であるが、この法を應用して黒付きの色色のこととしたものである。本朝町人鑑卷之三に「さる大方方に御吉例と正月三日の夜、大書院にて家久しき番はかり召寄せられ寶引を仰付けられけり。ふすま障子の内より五色の長緒を數百筋放出して、手毎に一筋づつ引



取り此緒の末に付置かれし物を下されける。小性引出す繩に桑の木を鐘木枝折りし、家老職の人出す繩に鏡鏡一圓文、或は唐綿の巻物を出しするあり、又は御物こしらへる脇指、片端には香白のふるきに取當るもあり、提重箱雅刀印籠巾着日傘靴子の夜着布圍り杓子を取るもあり云云」と見えたる。

頭巾、土釜頭巾などと書いてある。其形焙烙に似た頭巾なればいふ大黒頭巾、丸頭巾。俗つれれに「たうら」なる類の跡を踏まへ、俵の類様に積て金袋をかたげさせ、いふ事に徒のきくも、土釜頭巾を被て意見ただらいはれし被ての御影云云。遊遊笑話に、「古き繪草子を見るに頭巾中大かた丸頭巾と見ゆ（も）頭巾中た丸頭巾と見ゆ（も）流行自ら如此、これをほうらく頭巾ともいふ。」



〔中頭焙烙〕

〔防風〕織形科の草木、支那の原産で、我が國各地に栽培され、莖は直立して多枝に分れ、莖葉は柄で三羽状裂をなし、各裂片は狭長で先端尖り、葉硬くて毛なく、刺身はけん長どにして食用に供す、夏秋の候白色五瓣の小花を開く。果林子のこの文は、盛に「天も歩けば標にあたる」を、防風にひかけたのである。

はらうろくびや 日本祕密のほうろくびや打つて放つ(國性巻) 「焙烙火矢」銅丸の中に火藥を填充し、布で包んで漆を塗り、火を點じて敵中に投げ爆發せしめたものであるといふ。掛言字考節用集、器財門に「焙烙火矢。又作炮烙」。

*はらうべん そのよな腹の立つ時は念佛が薬ぢや、兎角如來の御方便、修羅然すそなたを呼びに来るも彌陀如來(音庚甲) 「方便」下根の衆生を導く爲に、佛が權智を以て悟り易き様に工夫して教へ導くをいふ。淨名疏に「用二攝方、隨機利物、故云方便」。 *はらうめん 糺の森より放免雑色具したる勇士つと出で(弘徽殿) 「放免檢非違使廳」の下部をいふ。伊呂波字類抄、波部・人倫に「放免、ハウメン、廷閣下部也」。放免の稱は罪人の放免された者をこの役に便つたからであるといふ。

*はか 掛乞ひに行く門出にはか行きの立ち酒、この世に残らぬ(女教) 「果」進歩。「おもひばか」(その條を見よ)の「ばか」の語である。この語古くは萬葉集巻十、秋雜歌部にも「秋の田の吾が刈粟可の過ぎぬれば」などあつて、稻などを植ゑ又は刈るとき、其地面に設けた尺割の義より轉じて功程の意にいはれる。女教油地獄のこの文は、掛鏡の取立てのはかどることに進行をきかせたのである。

*はらうろくつきん 炮烙頭巾の醫者殿は薬師如來の引合せ(女腹切) わか紫のほうらくづきん(夕霧) 「焙烙頭巾」はほうらくづきんともいひ、炮烙

*はかみむざん (國性巻) 「破戒無慚」佛敎の戒律を破り罪業を作つて自ら懲らざることをいふ。平家物語、小松内府重盛謀害の條に「内には破戒無慚の罪を招くのみならず、」 馬鹿信心 神力に咲く花なりとも眠み散して、世の人の馬鹿信心を散

ぜん(大經冠) 「馬鹿は梵語・蘇何(Hayaka)で痴の義。國譯名義集に「蘇何。此を痴といふ。」馬鹿信心は馬鹿げた人仰心の意。 *はかせ 人の心世の有様、蟲の鳴く音に至るまで、其折折をばかせとして際通の情をあらはせば(兼好) 「博士」と官名である。往昔は大學寮に文章博士・明經博士・明法博士・算道博士あり、また音博士あり、陰陽寮に陰陽博士・曆博士・天文博士・漏刻博士などがあつて、皆その道の敎官であつた。後には官務なくとも頭領宿儒を博士と稱した。序云、現今の學位の博士は「くし」といふのである。兼好法師物語見車のこの文の「博士」は手本といふ程の意である。

*はかたわら (烏帽子折)はかたわらを見よ。 *はかない いとはいはれおさん様どこにどうしてござるやら、常がはかない正直な心知つた私なれば(大經師) 「正直」の義。定なかなきをいふ「はかななり」といふは、淡泊で氣の弱く正直な意。和訓栞に「はかなし。何の計略もあらぬ意なるべし、俚言のあざと也。……、わづかにかりよめゝの意にいはれ、……、物語類にはかなくならんといふは死ぬる事也。

*はおひじめ 矢來の内に土壇を構へ、高手を許しはがひじめ、北向に引据うる(歌念佛) 四つ五つはり(か)かし、羽交締に引締り(倉橋山) 「羽交締」背後から兩手の腋下を通し腕元で強く締付けること。 *馬肝石 南海の火流布、獅子國の馬肝石(國性巻) 洞冥記に、元豐五年部支國貢馬肝石、春碎

以和九轉之丹服之、彌年不瀆濁、以之拂髮白者皆黑。 はきき、世渡る業の習とて、色を磨きし水ぐしの、はききといひし(俣) *夏なしのの上張や(加増曾ひし) 「羽利鷹鷹」の語より出たもの。羽振の利くこと、權勢ある人をいふ。この文は水櫃の齒を羽利にいひかけたのである。

*萩の戸 夜毎に出でて萩の戸の萩を食ひし(反魂香) 清原殿夜の細殿の北にある間の名。庭には萩はもとより黄色の萩草を栽えられたこと秘秘抄に見えてゐる。「はね馬の障子」を見よ。 *はぎやき 聞くにもさかすが袖しほる露の萩焼火皿出し(生玉) 「萩焼」長門の萩より製出する陶磁器をいふ。慶長三年朝鮮人の李敬といふ陶工萩に來り、歸化して高麗左衛門といひ、茶碗その他の小器を焼いたのに始まる。癸州私志・土產門下、器部部に、「磁器。傳云、今長門國萩之所燒是萩萩燒、是亦毛利元元自高麗招造陶器之人、是號高麗左衛門、今造之者其末流也。」

*はく 白と眺めて白牡丹、しやんとしてからいやみなく、しかも色香の深見草生玉) それにはあらぬ白のふう、風呂の煙のたちゐるまで(卯月紅蓮) 但は白の白茶か、風呂で焚いた煎じ茶か(卯月潤色) 「白」白人の略。はくは虚賀柳下巻にも、「白人は牡丹の花ならん、はでにしてしやんとして、とりわき花の富貴なるものにして云云」と見えたる。

*はく 夢を食ふ歌にいくばくの恨

はく 夢を食ふ歌にいくばくの恨

も名残も心をも(加増曾我) 辻の番太が夢くらふ、ばく勢町をぞ降りける(遊鯉) 夢をさまさんばくらうの、(こ)も稻荷の神社(曾根崎)

「穢し」と支那で稻荷の職名。熊に似て耳目。象鼻・牛尾・虎脚で、悪夢を食ふといふ。白鳥曷の義経實并序に「穢者象鼻耳目牛尾虎足生三方山谷中云云」後漢書禮儀志に「莫奇食夢」とある莫奇は穢だとの説もある。

加増曾我のこの文は、幾何かに穢をいひかけ、流離出世瀟湘のこの文は、夢食ふ穢に博勢町をいひかけ、曾根崎心中のこの文は、夢を食ふ穢に博勢をいひかけ、博勢町の稻荷の神社にひつづけたのである。博勢町の稻荷社は古來名高い稻荷社で、本國花分門集巻七、攝津名所の部に、「稻荷社。博勢町築神三社、第一平野大明神、第二牛頭天王、第三稻荷大明神」と見えてゐる。

はくい 伯夷が如き賢人も時に遇はねば力なく(大壺)

「伯夷世を遇れ隠れてゐた殷の紂王の世の賢士である。殷滅んで周の世となつたので、周の翼を食ふを恥ぢ首陽山に餓死した。論語。微子篇に「子曰、不降其志、不辱其身、伯夷叔齊」と評してある。

はくちやう 「七千萬の波立つて伯馬の跡を殘しを見よ。」

はくがう 「びやくがうを見よ。」

*はくじん 曾根崎の茶屋紀の國屋の小春といふ白人に、天藻の深い大盡が外の客を追い退け(天網島)

「白人略して「はく」(その條を見よ)とも云ふ。白人、私鬼の一種である。白人は多くは裏借屋に住居してゐた、その生立に就ては、雑喉賣や蟹籠賣や日屋取の娘や、或は下女のいたづ

らから生れた父無し娘の十歳許になつて、容貌の美しい者を親知らず知らずの契約で鏡を出して貰受け、追ひ使や炊事などの荒仕事させないで、貰ひの綿糸を引かせなどし、髪を島田鬘に結はせ綿糸の纏を著せ、兎月顔容の美しいものやうに磨き立て、十四五歳になれば隣家の囃を頼んで床入の諸分を言聞かせ賃借の綿布を着せて貸座敷に出して客を取らせたのである。彼等は一夜に一座勤めただけでは、損料者の支拂や周旋屋其他のものに差引かれて得得なしになる。一座勤めて少しの苦界に沈む者もあつた。白人の名義に就ては、

五箇の津餘備 男卷之二都 「いつの頃より、はくじん」と名づけて、傾城にもあらず茶屋女にしてもあらぬ遊女の出来ぬ。白人といふをすべに用ひて白人と云ふしと見え、傾城禁短氣に「諸方の遊び宿へ遣はし、物ごととどなく初心に作りなぬ。これ白人一種開闢の時節の風儀なりしが、近年は初心悲しかなを、此道末世になりて、白人といふ一種の名に背き黒人暗の風俗となれり」と見えぬやうにも、もともとも色を賣る女なれども、おぼに柱立てたことからは、しんと即ち素人を白人と書いて、之をばくじんと言ひし九名稱であるが、公娼の稱にも用ゐるやうになり、好色散毒散に「嶋の内にては女郎



【觀所線味三曲流風】

を總稱して白人といひ、又茶立女ともいへりて見えてゐる。心中天網島のこの女も、曾根崎の茶屋紀の國屋の小春といふ公娼を白人といはうである。白人の勳眼に就いては、好色大鑑(元禄五年刊)第二、白人之由来の條に「情代金壹歩銀三兩乃至拾匁、しゆらひは外也」と見えてゐる。私娼としての白人は元祿資永頃東京に多くゐたのである。(そうがし)の條の條をも見よ。

はくたわう 藤九郎盛長はくたわうの怒をなせば(烏帽子折) 躍上り飛上り天も響け地も響け、どうどうと踏んだる足、勢ははくたわう・章駄天・四天王天智天皇) きまゝん國の鬼王、ばらな國のはくたわう(鎌田) はくたわの荒れたる勢(饒天皇)

「舞多王」はくたわう(白鹿王)ともいひ、印度波推奈國の王で、鬼を搦めた剛勇の神である。源平盛衰記卷二十七、信濃横田川原軍の條に「覺ては引き引きては、密せては返し返しては密せ、入組み入替へ戦ひける有様は、胡人が虎狩、舞多王が鬼狩とぞ見えたる。夜討會舞の本に、「かたきの屋形は八千八ながれなり、馬はつちぢ人は亂狂、きまん國のきわう、羅せんくのらわう、鬼を搦めしはくたわう、綱金時兼由、田村俊と、餘吾將軍二相をささる人なり」。安倍宗任、松浦重家、波瀾門、白駒、四天王、章駄天、斑足、浦重多利夜叉、提婆達多、婆伽抄、上巻に「鬼間、二間子也、南間常不上、有、靈籠卷之、其内南北行立、柳厨子、眞柳膳具、兩壁、白澤王、切虫綱」とある白澤王はここに白澤多王のことであらう。白澤を靈籠録には獅子の別名とし、事物紺珠卷二十八には護の一名としてある。

*はくちやう 昔の烏帽子白丁より鳴が手織の衣手(兼好)

「白丁、神事神樂などの時に物を穿き行く人夫の被る服、または白丁を被る者。」

はくてい 一枚ひねつて額にあて彼のばくていに飛入れば(天織冠)

「博庭賭博の場。この文は流曲・海人に、「一つの利根を抜きもつてか海底に飛入れば」とあるをもつたのである。「女房故に捨てん命云云」を見よ。

*はくのなは 不動明王の縛の繩、手綱に變じ給へや(會橋山) 戀と思ひに縛られて、情のきつな縛の繩、不動坂にも差掛かり(萬年草)

「縛繩不動明王の左手に持ち給へる金縛の繩」

はくばのせちゑ 「あをまのせちゑを見よ。」

はくもんとう せんぎまちまちばくもんとう、季中にそこを道出し(藥、薩摩歌)

「(薬)門冬山野の陰地に自生し、小形花を開き淡紫色の花被を有し、種狀の楕圓花序に排列し、果實は黑色である。この草の地下部は藥用となる。薩摩歌のこの文は、薬門冬に問答をいひかけたのである。」

*はくや 莫耶の劍黄金を磨き、絹笠さつと差かくれば(國性爺) 唐土晋の武帝天下を治めて、吳國の方に紫の雲氣立つて怪しみに、



【冬門薬】

雷煥といふ者天文を考へ、土中を撃つて干將莫耶の二劍を得たり(堀山遊) 莫耶を鈍しとし給刀を鈍しといひ、周の鼎を棄てて瓢箪を寶とするといひしは(雪女)

「莫耶」支那上古の名劍の名である。吳越春秋に、吳の干將五山の精六金の英を采り、天地を候ひ陰陽を伺ひ百神臨視す、而して金鐵の精未だ流れず、干將その妻莫耶と髮及び爪を削つて之を鐘中に投ず、金鐵乃ち濡らさるるに二劍を成せり、陽を干將と云ひ、陰を莫耶といふと見えてゐる。荀子「君子篇」に「干將、莫耶、古之良劍也」堀山遊に雷煥が干將莫耶の二劍を得たといへるは、謂來太阿の二劍と取違へた誤である。「ちやうくわ」の條を見よ。雪女五枚羽子板のこの文は、賢人君子は斥けられて佞人小人の重んぜられるに喩へたもので、古文眞寶、後集、寶鑑の甲二屈原一賦に「莫耶毎し鈍を、鉛刀爲し鈍、于嗟賦賦、生之亡」故を、幹葉周鼎、寶三康瓠」等」とあるに據つたのである。

はくらう 「はく」を見よ。

はくらく 天性名馬の相ありと伯樂しきつて申すに付き(十二段) さて伯樂には桐原の権平内承つて、一一に出緒を語つて牽かせたり(大藏虎)

「伯樂馬を相する人。韓退之の雜説に、「世有伯樂、然後有千里馬」とありて註に「伯樂姓孫、名陽、善相馬、天上有二星名伯樂、在天廡星之旁、人見之孫陽謂馬、因號之曰伯樂」

*はぐん さあ破軍が直つた仕濟しさと、そぞろに笑うて勇みみなす(堀川波鼓) はぐんは辰巳に向う

たり、東の門より南に附いて乘れや(甚難太平記) 「破軍星」の略。北斗その條を見よこの第七星にして光芒熾烈をなす。和訓栞、はぐんせいの條に「毎月運轉して息まず、十二時に隨ひ其處を易ふる也。陰陽家では破軍星の御尖に當る方向を萬事に利なしとして忌む。破軍が直つた」とは、不吉であつたものが吉方になりかはつた意。

箱ぐち 「ぐち」を見よ。

はこやのやま 丁固が夢の常盤木は貌姑射の山に枝を鳴さす(文武五人勇) はこやの山の雪の御賀には甚だ萬歳のしらべを合す(源義經)

「貌姑射の山」莊子「逍遙遊」に「藐姑射之山有仙人居焉、肌膚若冰雪、渾約若處子」とありて仙人の棲める山の名である。よつて以てまた上皇御所にあてていふ。

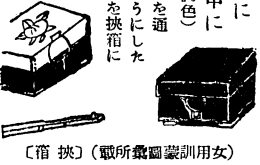
*はさみはこ 未来に情・現世に慈悲、中に憂身を挾箱(卯月潤色)

「挾箱」衣服を入れ、釋を通して襪に履はせ行くやうにした箱。この文は挾みを挾箱にいひかけたのである。

*はざむらひ 足立づれの葉侍が御姫方に口取らせて乗るならば、罰が當つて落馬致すは定のもの(蛙合歌)

「端侍」葉侍とも書。端武者ともいひ、端はハシタの義。卑しき身分の侍。舞兵。

はさら 思ひ亂るるべさら(關八州) その頃の公家大臣何れもはさら好み、民のつひえも顧みず(大掛物)



〔箱 挾〕 (歌所義圖訓用女)

「發婆羅」婆羅は文選の註に「婆娑、放逸貌」と見えてゐる。「羅は接尾語」の音寫か。と見えてゐること、亂れることをいひ、また伊達・華善の意に「い」。和訓栞に「本平記にばさら風又そなるばさら」にふけり、又扇折箱とする説あれどいかが、跋折羅は梵語「ばざら」金剛と譯し、金中の至剛のものは適合しない。「ばさら髪」は亂れ髪をいひ、「ばさら好み」は伊達華善を好むをいふ。「ばさら」を見よ。

*はし 太夫ばかりが五十人、天職が七十餘人、隅の端の二百餘人に餘つて、禿どもさへ百人餘(酒呑童子) 亭主うすうす見知があらう、廓の縦横十文字、昨日まで端せせりした我我、俄分限は見らるる通り博多

「端」端女郎の略。太夫・天神・隅よりも下位の遊女をいひ、店頭に出張つて客を招くによつて見世女郎ともいふ。汐、影、月などいふ遊女は皆(八倫談圖義所載) 端女郎也。

御前義經(元祿記) 十三年刊に、「端女郎は惣戀より下を、みせ女郎をいふなり」傾城太本神皇(寶水二年刊卷四、傾國土産に「爰の難波に

ては端の女郎も汐影月などやさしくいふに云云)「しほ」か「ぐち」みせぢやらう」の各條をも見よ。「端せり」とは端女郎と亂れること、即ち端女郎を揚げて遊興すること。「せせり」は「せせる」を見よ。



〔端女郎〕

*はし なたは誰でばし(さざろ(冥途飛脚) 傾うてばし下さんすな(薩摩歌) 御尋れありまします(小栗判官) 御尋れありまきとは何事にてばし御座候(反魂香)

謡曲「紅葉狩」に夢はしまし給ふこととあるやうに謡曲・狂言など世中のものに多く見える助詞で、意を強める語勢がある。

*はしかい 御年十六七まで、はくまひ、姫君様には似合ひ頃、十五夜我我にはちとばし(かからうといひければ(孕常盤)

「はしこいの轉。すばやい(敏捷)の義。和訓栞に「はしかい。速き意にまほ俗語也。よて手疾き事をはしかきなどいふあり。孕常盤のこの文は、心いらだつ意、即ち年増女では挑んでも餘り若い男は心うひうひうして、ちの心をいらだたす事であらうとの意」

はしかくし 御乳母子海上太郎兼盛はしかくしの遣戸蹴放し躍出(安夫池)

「隣密」隣前に二本の柱を立てて屋根を設け、垂簾を寄せる爲に造れるもの。

*はじかみ 詞の義理にばじかみや、智者は惑はず勇者は懼れぬ(生付(宵庚申))

生薑をいふ。このもの辛味あるによつて幽蹙の義の名となつたのである。この文は「恥ぢ」に「はじかみ」をいひかけたのである。

はしぜせり 「はし」を見よ。

*はしたなし 色好まぬ者は玉の歪の底なき心地と書きながら、このはしたなき振舞は筆に書くは偽りこと(兼好) 若しも螢に光なくのしりて皆皆興へ入り給へば(小栗判官) 望なら捻つて遣るはしたない女めと(持統天皇)

はしちよろろ 「はし」を見よ。
はじのほひ 清盛は紺の直垂、はじの匂の鑑に蝶の裾金物打つて(鎌田)

はしはみ 襟・樞・襟(密殿天皇)

はしぜせり—はすぎり

【鑿】山野に自生する落葉大木で、高さ十尺餘に達し、種子は食用となる。持ちし木の實は何何を見よ。



【みばしは】

*はしひめ 紅梅、竹川(はしひみにてならひ(流鏑))
【橋姫】源氏物語の巻名で、宇治十帖の一。別に橋姫社をいへる橋姫もある。そは地名部を見よ。

はしやく 在所の衆が養ひてやうやう馬を追ひならひ、今は近江の石部の馬借に奉かします(舟波興作) 當代は道中筋も吟味強く、馬借問屋へことわられ、悪名が立てばんとんとすたつて、出入の門も塞がれば(舟波興作)

はしやれ 我ががなんぼ沙汰を致さずとも、あの傾城のばしやれ者それなをいはずにみませうか(夕霧) 町方に居る分にいひなした私が身が、ばしやれたなりで逢はれもせず(水明日)

はしやら」といひ、「はさまり」その條を見よ(その説。伊達風流。華著にしてみだりがはしし風情なるをいふ。「ばしやれたなりで」とあるは「ばしやれ」は動詞に轉換した語である。嬉遊笑覧に「要塗の義にて狼狽なるをいふにや。……去來抄に謀略付合し事をいふに、白粉をぬれども下地黒い顔、役者もやうの袖の

薬もの。この前句、今やうばしやらの女とみよ(いへり)。

*はしゆん いかなる天魔波旬なりともたまりつべうはなかりけり(善樂太平記) 恐くはこの時致天魔波旬に出逢ふとも(倉橋山)

柱一本の主 朝がけに擒つて洛中を引渡し、何でも柱一本の主にしてくれんもの(雪女)

*はしり お竹は兄弟の子をばしりの下へ隠し(心三河自道) こりや半兵衛、はしりの出刃庖丁よう研がして置いたぞや(荷庚申) はしりの竹の子片荷には、獨活・生姜・青山椒・白瓜二つ(荷庚申) 走り書譜の本は近衛流(天細島) 隠れんぼ。走り衣用(明天皇) 外の駈落走者と違うて、明日尋ねるとは言はれぬ、死に出た心中なれば(重井簡)

【走】走りの下「走り」の出刃庖丁「はしり」は、鑿所たがしをいひ、物を洗つた水を流し走らすよりの稱。
「はしり」の竹の子「はしり」は、魚鳥野菜などの初物(旬)に先立つて出たものをいふ。嬉遊笑覧卷十上、飲食部に「初物を走りといふ、……年の始に食食物に(鹿・兎鳥などの走る物)を用ひし習ひ故、後には何にまれ新らしく出来る物を走りといふことなれり」。

「走り書」は、筆を走らして草體に書くこと。「走り書き」の本云を見よ。

*はしりこん てれめんでいなばじりこん、さんたらにいよいよ。萬能(宵天羅冠)

*はしる 舟では割れたといふは忌、頭の顛骨がはしつた(博多)

*はすぎり 首討つは常のこと、胴切か立割かはすぎりかかぞ立騒ぐ(冷泉傳) 姉御の頬は何に似た、傷口にはすぎり鼻、猿眼に鉢額(振袖始)

「はす」は斜をさぶ。「はすぎり」は胴腹を斜に切下げること。斜斷。「はすきり」は鼻の反つてゐる。即ち獅子鼻をいふ。和訓栞には「すにそぐなどいふは斜をいふ、蓮のまき葉よりいふにや、鼻鼻をばすきり鼻などいふへり、又鼻鼻と見ゆ」。「はすきり」は「はすきり」といふ。菓林子作相續入道千正天に「櫻解の金物よりはすきは掛けてぞ切折りける」と見えてゐる。

*はすは はてはすはなる身にそま
り、うはの空なる世にならひ
(水朝日) 新御靈に拜み納まるさし
も草、草のはすはな世にまじり、
三十三に御身をかへ、色で導き情
で教へ(曾根崎) 柏屋嵯峨はすは
に(こざる)(生玉)

「蓮蓬」浮蕪なことを蓮の浮葉の風や水にびら
りに撃へた語であらう。なまぬいた姿をし
て行儀わるく、男に飽れて面の皮厚きをい
ふ。今様二十四孝(寶永六年刊)巻二、寒のう
ちの眞桑瓜の條に「傾城はおもてにつよくは
すはなるを」とし、内證はやさしくおろか
にして「驚だてせぬを上の出来ものと此道の
本阿彌の申されき」はすは者しは客に淫を賣
る私娼の一種である。好色一代女(貞享三年
刊)巻五、露間屋説の條に「萬寶帳離波の浦
は日本第一の大澳にして語國の商人ここに集
りぬ、上間屋下間屋敷を知らず、客馳走の爲
に蓮葉女といふものを拵へ置きぬ、是は飯炊
女の兒好むなるが、下に薄綿の小袖の上に紺
染の無紋に、黒き大幅帯・赤前垂・吹簫の京
弁、伽羅の油に際めて細緒の髪髷、延の鼻緒
を見せかけ、其身持れは隠れなく、随分
面の皮厚らして人中を恐れず尻振をてのよ
こよこ歩き、びらしやらずが故に此名を
つけぬ、物の宜しからぬを蓮葉ものといふ心
なり。世間娘實質(享保元年刊)巻五、傍草
の惡性うつりにけりな、徒、娘の條に「主な
しの思出に毎日のうかれありき、身をぞんざ
いに持なし、女ながら針待つすま、知ら
ず、氣をつめてぢめなる春公はともせぬ
心なれば、上間屋下間屋へ蓮葉女といふに
づら春公勤め、諸國の商人の夜の慰みもの
なつて、果は新地堀江の二瀬に流れわたり」

書言字考節用集人倫門に「蓮葉女。今世遊
女の稱有此稱」。

芭蕉布 私やひとり寝の芭蕉布、御
恩きびらの目も詰る(薩摩歌)

芭蕉の纏帷で綴つた布で、沖繩地方から産
出。

ばせん 道理が立たれば暇の状は受
取らぬと馬鹿に投付け(倉橋山)

「馬鹿尻 豹痕などの毛皮で造つた鞍お
ほひ。

はそく 道中ようて手がようて信心
者で諺知りで、戀一通りのはそく
なば抜けて行く程賢うて(本領曾我)

「把束」つかぬの義。束縛。はたが。本領曾
我、新町太夫づくしの條に「戀つがねぞ
りためて」とある「つかね」は即ち把束と同
じである。(山本九兵衛版八行本)この文
に、「わそくとあれどもはそくと書くが正
しい」。

*はた 幡・天蓋・袈裟の一重も上げ
はせす(卯月調色)

「幡」蓋儀形幡をいふ、寺院の本尊の前に懸れ
るのこれである。

はだいぎん 太刀折紙の馬代銀、五
十日懸の蠟燭の、明けぬ暮れぬと
販ひて(反魂香)

「馬代銀」昔時馬に代へて附つた銀貨をいふ。
黄金一片を大馬代、折紙片を馬代といふ。
異状字のこの文は、銀紙の太刀や、折紙包
の馬代銀や、その他方々からの進物をいふた
のである。

*はたがる 立ちばたががつてわめき
ける(哀途飛脚)

開張の義。手足をひろげる。和訓栞に「大手
をはたけなどいへるは開く義なり」。吉野都

女稱第二に「無味喃桶まではたけ出し、あ
るはたけの廣げる意で、無味喃桶まで持出
してひろげるをいふ。

*はたぐ からだば粉にばたかれて
も、茂兵衛が口から言分けせぬ
(大經師) 仔細のあるこの一步粉に
はたかれてもやることならぬ、お
おこの長作が粉にばたかれても取
つて見せう(生玉)

打ち砕く。掲き砕く。運歩色遣に「搦ぐハタ
和訓栞に「はたぐ。身をはたぐと、白にて物
をはたぐともいふ」。

*はたご 或は芝居で目を暮しはた
ごに命を養ひて(卯月紅蓮)

「旅籠」旅人宿。「旅籠」は蓋し旅行の時に食物
を容れて行く籠の義、轉じて旅人宿をいふこ
とになつたのである。箋注倭名類聚抄に、
「籠」唐語云籠、當依反、漢語抄云波太古、俗
用旅籠二字、八多籠見、萬葉集皇子舍人等作
歌、馬籠云之籠、籠爲旅人食之籠、按波太古
容、馬籠云之籠、籠爲旅人食之籠、按波太古
物語、今俗謂旅籠實爲波太古、再轉置耳
說文、籠、旅馬籠也、王念孫曰、籠猶兜也、
今人謂以布盛物曰籠、義與此同」(序
云、籠曲、望月、か、か、に候者は近江の國守
山の宿、甲屋の亭主にて候」と見えてる。甲
屋は兜屋をかく掛いたものであつて、兜屋は
籠屋を即ち旅籠である。甲屋といふのは
篋と見るべきで、その昔に、兜屋などいふ屋
號があつた善のものでない。

はたした衆 持のお方が値上したい
祈には、強氣に上り高天が原の八
百萬神、はたした衆の下りを祈る
は、高きお山を時の間に麓に下る

嵯峨の釋迦(女歌)
「把多した衆把多は果の義で、米を賣り果す
をいひ、よつてまた米を高値に賣り置いて米
相場の下落を喜ぶをいひ、米商人の通用語
である。東白著・寶實出世(通俗經濟文庫)
米商實通用正字の條に、「把多(實)をはた
と、物の多きを」と云ふ心なり。商人職
人懷日記(正徳三年刊卷一)に「米賣ひこんで
……高相場に賣置きをしてさがるを慢ぶをは
たと名付け」。「把多した衆」とは米を賣つた
人達へて居る。女殺曲地獄のこの文は、米を
持當へて居る人は高値に賣りたいによつて、
「値上したい云云」と書きつつ、米を賣つた
人達は米を安値に買戻して書きつつたので
ある。「下り」を祈るは云云と書きつつたので
ある。法印の言に「まはしきやうに高天が
原の八百萬神を高値の「馬」にひかけ「盛
暇の釋迦」を「下り」の頭、籠によつてひ
つづけ、以て神佛をきかせて物籠ぶつたので
ある。その云ふ所は何を言出すやら滑稽にし
て、談話は綴語を生みいつもながらの才筆で
ある。

*はたせ 馬に鞍置くひまもなく、洗
ひ纏にばたせ馬(兼好) 馬のほるひ
なしめかれてばたせ乗つて駆くる
もあり(雲霧太平記)

「褌着馬に鞍置かぬをいふ。褌馬。
*はたたがみ 夕立頻るはたたがみ、
日刺も知らぬ松蔭に何やら暗うて
見えこそ(今宵)

はたたがみの義。霹靂。神鳴。
はたて 跡に入日の影残る、雲のはた
たての天つ空(源義經) 雲のはた
たての天つ空(國性齋後日)

雲の義。果。際進。「雲のはたてのはて」とは

はたての天つ空(國性齋後日)

雲の義。果。際進。「雲のはたてのはて」とは

はたての天つ空(國性齋後日)

雲の義。果。際進。「雲のはたてのはて」とは

はたての天つ空(國性齋後日)

雲の義。果。際進。「雲のはたてのはて」とは

聖の盡きる果の意。
はだれ ばだれ雪間をあさるてふ小鳥狩して遊ばんと(根元曾我)

「はだら」ともいひ、「はたら」(班)の意。和訓栞に「はたれ。續後撰集に庭もはたらに雪降りけりと見ゆ。舊説にまたらと通ずといへり」。

***はち** 出家せんとは上分別、身が門へもはちに出よ、手の内も餘所よりは八擲にさせんとす(加増曾我)

「鉢」托鉢の略。「たぐは」を見よ。
はちいつ 院の御庭に八僧の、たもともかくや初春の(天鼓)

「八僧」天子の舞である。僧は舞樂の行列である。一僧毎に八人なれば、八僧は六十四人並び立つのである。(8)論語八佾篇に「孔子謂季氏八佾舞於庭、是可忍也、孰不可忍也」

***はちかん** 此世から八寒の苦患は我身一つにて(重女) 私が親の未進米この六日の吉書に立てればもとの水牢、この世から八寒の地獄へ墮すわしが心、苦にかげうではなければも案じても下んせす舟波與作

「八寒」八寒地獄の略。(1)頸部院、(2)尼刺部院、(3)須弥院、(4)阿婆院、(5)虎虎院、(6)鹽鉢院、(7)鉢鉢院、(8)摩訶鉢鉢院、以上八種の寒氣散る地獄をいふ。婆沙論に「兩膝部下有、過五百由旬、乃有其獄、然此地獄有大、小、大則八寒、八熱云々」。

***はちぢやく** 八逆・五逆・十惡人(國性爺) 佛身より血を出す八逆罪ぞ恐しき(釋迦)

「八逆」謀反、謀大逆、謀叛、惡逆、不道、大

不敬、不孝、不義、釋迦如來誕生會のこの文の八逆罪は五逆罪と云うた方がよいやうである。「しごきやく」といふ。「こくり」と同じ語であらう。

はちく 「はつく」を見よ。
はちくどくち 「はつくどくち」を見よ。
はちけう そも華嚴寂滅道に始り法華涅槃に書き終る、其中間五時八教(百日曾我)

「八教」華嚴時から法華般若時五時に於て説いた法華の四教と化儀の四教をいひ、自家の立てたものである。

はちげん この老僧が手足をいいで取りは取れ、渡すことばかなはぬと、はちげん放つて宜へば(善盤太平記) 義貞にてなき時は獄門の木の下にて腹切つてうすべきと、はちげん放つて申せしかやうのたぬ(女橋) 甲が舍利になるとも親王を助け奉ると、はち言放つていひければ(持統天皇)

「はつげん」(發言)の轉訛。「はちげん放つては言ひ放つを強めていへる言葉である。雁金文七字治加賀孫正本に「主人へ言譯すべいと、はちげん放つてわめきける」。

はちごうがしや もしそれ八恒河沙の水神・龍神・惡僧邪法に惱まされ(龍眠天皇)

「八恒河沙」無數な意にちよふ。「ごうがしや」を見よ。大般涅槃經卷六、大乘經を信解する人の宿福の深廣を明かす文中に「若有衆生、於八恒河沙等佛所發善提心、然後乃能於惡世中不謗是法云云」。

はちこくり 三界を家とよ、走り走り巡る鉢こくり(開八州)

鉢叩坊主をいふ。「はちたたき」を見よ。「こくり」は叩きこくりであつて「頭をはりちらし」を「頭をはりこくり」といふ。「こくり」と同じ語であらう。

はちざ 玉座に續いて大理卿大江の匡房・三九卿八座七辨席を連れ(鶴田川)

「八座」參議八人を云ふ。龍隱抄に「聖武天皇天平三年置參議、大同御宇罷參議、萬三三繼七道觀察使、合八人、弘仁御宇罷觀察使皆爲參議、……八人自此而始、依之有八座之號」。

八十八夜 八十八夜及びなき、年は十九と二十五の、名残の霜と見上ぐれば(天經師)

立春後八十八日目の日、陽曆五月二日頃に當る。巢林のこの文は曆上の語を以て飾り、八十八夜は八十八歳米壽をきかせ、米壽には及びなき年若き十九と二十五のといひ、又春霜の降るは八十八夜の節を限りとするので、「名残の霜と見上ぐれば」といひつづけたのである。

はちじぶまつしや 世界國土を守らせ給ふ末社は八十末社なり(烏帽子折) 大酒企悅おかげを蒙る八十末社、さすがの邸駕籠きされて(龜)

「八十末社」松の葉(元祿十六年刊)卷三といふもの眼に「みもす川のかけ清く、外官は四十末社内官は八十末社と見えたる。伊勢守名所國會に「内官に八十末社といふこと舊記になきこと、何比より云傳へしにや」とありて末社六十九の社名を擧げてある。淀川出世浦徳のこの文は、「八十末社」を數多の對問の意に用ひたのである。

はちじもんじゆ 六字かりん・八字文殊(龍眠天皇)

「八字文殊」文殊菩薩が衆生を利する爲に、御身を略し、摩羅羅刹女、龍の八字咒の書體に變せられた。よつてこの八字咒を念じて法を修するを八字深法といひ、息災、惡夢などにこの法を修す。

***はちだいちこく** (實舌教信)
「八大地獄」八寒地獄または八熱地獄をいふ。「八寒地獄」はその條を見よ。「八熱地獄」は(1)等活、(2)黑繩、(3)業合、(4)叫喚、(5)火頭、(6)焦熱、(7)大焦熱、(8)無間、以上の八地獄をいふ。

はちだいどうじ 八大童子は八識の道を導き(井筒)

「八大童子」(1)慧光童子(左手持)、(2)喜喜童子(右手持)、(3)阿耨達童子(右手持)、(4)指德童子(右三古鉢)、(5)烏俱婆童子(右手持)、(6)清淨比丘(左持三鉢)、(7)給鬼羅童子(合定惠)、(8)制多伽童子(左手持三鉢)。

***八大龍神** (國性爺)
八大龍王ともいふ、即ち、(1)毗陀龍王、(2)跋難陀龍王、(3)沙羅難陀龍王、(4)和修吉龍王、(5)德叉迦龍王、(6)阿那婆達多龍王、(7)摩那斯龍王、(8)優鉢難陀龍王。

***はちたたき** 鉢叩の仕上げを見いとへらず口(開八州) 宵は嘯簾曉はうちとるあたまたの鉢叩(開八州)

「鉢叩」鷹の羽を叩いてた放つた十徳を看て茶筌を賣り、鉢を叩いて無常迅速の明歌を蓋れた言調で唄つた勸進物語の類である。蓋し空也上人が頭髮を垂へ、拍子打つて唄ひ、踊舞しながら念佛を誦讀に弘通した遺風を傳へたもので、其節は鉢を叩いたのであつたが、後に瓢に代へたのだと云ふ。和漢三才

舞會・山城佛廟・紫雲山極樂院の條に「鉢敲頭
舞與尋俗俗無別、着福祿・洛内外往來祿三
瓢齋・明名念牌、又販二茶室爲樂、自十二月
十三日至除夜、每夜半以後巡三五處戶陀林
瑣瑣、以爲三昇萬壽詞、空也上人法流、
古者敲鉢、今代瓢齋、聞八州驚馬の文
によれば、鉢敲は十徳頭巾を被り、その唄ふ
歌は、
光ぞと
蔭頭む、
世の光ぞ
と頷む、
ちぎのき
よのきよ
ひん、
ひん、
御寺に田
螺にきよ
ひん、
極樂
のホホ前
に流るる涙川、如何なる淵の瀬になり、天地
の恩國王の恩としや世の中懸てか慰めてか、
只何事も後生なりけりなうだ、なうだな
もうだ彌陀願む、彌陀の誓を頷む身の、人は
雨夜の星なれや、雲晴れども西へ行く、……
大恩教主の
秋の月、濕鬢
の雲に月と
かや……と見
え、呼ぶ者あれば即
ち、御用なれば一本
が六文、青竹茶笥でお茶ちやと立てるを召し
ませい、叩きの一節面白いを添へます」と
見えてゐる。鉢叩の歌は安齋隨筆二十九の巻
にも載せてあるから、それに就いて見よ。



〔叩鉢〕

*はちぢく 大乗八軸の骨髄信心の
行者(出世景清) 八軸の妙典・九帖
の御書、燻る焼香しんしんと(盛久)



〔叩鉢〕

〔八軸〕法華經のことで、八巻ある故にいふ。
佐佐木先師に「經本まじりの八のまき、書い
て流してしがらみ」とある。「八の巻」は法華
經を云うたのである。
はちぢやうぼじやり 八丈ぼじやり
の白無垢は平等大慧の床にいと
七條八掛
七條八掛などいふより、今一際長く八丈に
いひなし、長く引ける白無垢衣を形容したた
である。「ぼじやり」は「ぼんじやり」ともい
ふ。その條を見よ。巢林子作「百日曾我に」と
乗差提の胸は平等大慧の圍に嘶ふ」とあると
併せて見て、其もぢつたのを知るべきである。

はちぢん 風に目覺す西湖の八景、
我八陣、平沙の落雁(唐船歌)
〔八陣〕魚鱗、鶴翼、長蛇、偃月、鏢矢、方向、
衝棚、井雁行、以上の八陣をいふ。軍法採用
集・十二に「水前に流るるを魚鱗とするべし、
前のまるきは鶴翼、前のとがりたるは鏢矢、
山前にあるは長蛇、山後にあるは方向、山を
東に受けたるは偃月、水を東に受けたるを衝
棚、山西に當るを井雁行と知るべし」。八陣
につきては異説あれども頗ほしければ略す。

はちぢん 三途八難の惡趣に墮
す(反魂香)
〔八難〕地獄、畜生、餓鬼(以上三惡道即ち三
途)、盲聾瘖瘂、世智辯聰、佛前佛後、北俱盧
洲、長壽天。以上は苦の故に難である。世智
辯聰は邪見にして惡を増長し正道に遠ふ故に
難である。佛前佛後は佛の教誨に値はれない
故に難である。北俱盧洲、長壽天は樂なるに
よつて佛法を聽く障りなる故に難である。以
上八の難の中三途を以て最も難苦とする。

はちぢまき 四夷八蠻を切り靡
け(嵐山遊)
〔八蠻〕蠻は南夷をいふ。八蠻は爾雅の疏に、
「天竺、暹羅、焦憐、跣脚、修耳、修耳、狗軀、
旁耆」を喚べてある。一説に「八」は數の多き
を云うたのであるといふ。
*はちぢらき 當所に於て諸勸進鉢
ひらき堅く停止せらるる段(三世相
當の秋の山(淨智堂))
〔鉢開〕はつちぢらき(鉢坊主)と同じ。尤草
紙に「座敷を廻るは盆、町を廻るは帯太郎、
門々をめぐるははちぢらき」。書言字考節用
集・人倫門に「鉢坊主、右提錫左提鉢、道側
而行、局・七家乞食、是比丘法律云云、今世
稱鉢坊主者類同義異、同日不可談」。但言
集記に「上方にて鉢ひらきと云は關東のハツ
坊主也、鉢を提てハチと云ふをハアチと云
故に、例の關東調にハツチと云なり」。はつ
ちを見よ。巢林子作「信州川中島合戦に「刺
りこぼつて願人坊主鉢ひらけと囁られ」と
ある。「はちぢらけ」は「はちぢらき」の轉訛で
ある。(かしまことふれ)の條をも見よ。

*はちぢん きみのよいあたまのす
り鉢(薩摩歌)
〔撥髪男子結髮の名、髪を剃込んで鬚を結う
たもの。我衣に「淨瑠璃太夫江戸半太夫はち
びんにてはけ長くたてかけといふ中制あり、
寶永年中」とあるを、萬金丹(元祿七年刊)
に男伊達のことといへる條に「撥髪を髪」と
見たれば、元祿年間既にあつた結髮であつ
て、蓋し結髮の鬘の形が三流の撥に似てゐる
よりの稱。三乘五乘七方便四種八部
二十五有(釋迦)
〔八部〕人類以外に生存せるものと想像されたる
八種の生類、即ち天・龍・夜叉・乾闥婆・阿
修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽をいふ。
はちまいがた 乗物やれ參れと傳へ

て八枚肩、徒歩(徒歩) 脇腰やつこら
さ(會稽山)
〔八枚肩〕漏籠一挺に昇夫八人附くものを
いふ。
*はちまん 八幡八幡さうした事で
更になし(出世景清) 何もいられぬ
嬉しい心、八幡我等も心底變ら
ぬ(鐘聲三)
〔八幡〕弓矢八幡(その條を見よ)などいふに
同じく、自誓の詞である。僞るに於ては八幡
様の神罰を受ける法もある意である。
はちまんぐうのおんはご 自らそ
れとは恐れながら八幡宮の御母
御、鬼界高麗百濟國の荒き夷を攻
滅して(兼好)
〔八幡宮の御母御神功皇后をいふ。ニノの文
は、神功皇后が三韓を征伐されて御凱旋され
た御姿の繪馬についていうたのである。
*はちまんぢく 身は八裂に切裂
かれ八幡地獄に墮つるとも(冷泉傳)
〔八萬地獄〕一切衆生に八萬四千の煩惱あつ
て、種々の惡業を作り惡業によつて苦しみを
受ける八萬四千の地獄がある。八萬地獄とい
ふはその大數を擧げたものである。
はちまんほふさう 提案達多ば八萬
法藏を讀みふさう(釋迦)
〔八萬法藏釋尊所説の一切聖教をいひ、八萬
は八萬四千の略、法藏の法は佛法、藏は含藏
の義。〕
*はちもんじ 眉の八文字は隠せど
も隠れぬ足の八文字虎が懸(しや
ならしや)ならの八文字は二玉をゆ
るがす如くなり(女椿) 水際たつて
喜瀬川の龜菊が八文字も下に見お

ろす假粧坂(扇八景)

「八文字」女の歩む足つき、即ち内八文字のこと。入江柳子童舞、幽遠隨筆巻上、今遊日記に「文字をだに知らぬ者も足は十もじに踏みてぞ遊ぶとあり、是等を思へば興あるにや」。

*はちりしやう かやせかやせの鉦

大鼓の、罰利生あり佛法不思議(實古教信七墓刻) 罰利生ある親方にて「涙をとどめ、こりや平兵衛いうて居ては果しがない(心中双水朔日)」

八王子 柿は木酢八王子、初霜寒く

置きそめて(鑑暎天皇) 産出地を冠した柿の名。「ふでがき」の條を見よ。

はぢんがく 秦王武周を討つて破陣

樂を作り、國七徳に化せしとかや(本領曾我)

はついでん かくて萬戸は羽旄の旗鉾

八音の管絃を奏し(天龍冠) 「八音」五經通義に、金(鐘)、石(磬)、絲(瑟)、竹(簫)、匏(笙)、土(埙)、革(鼓)、木(祝、敔)、以上の八種の樂を擧げてある。

*はつつか 臣錦戸等重れて源君 亞相

はつつかの仰を蒙つて(源義經) 「はつつか」(巻)の促聲に變じた語。「うはつつか」の條を見よ。

はつかう どう取の祈は四三五六社

大明神、八かう七の社(安穩) 「八講」法華八講の略、法華經八卷を八人に分ち、八座に講讀供養する法會である。八座の講は法華經の説時八ヶ年に擬するものであるといふ。公事根源集釋に「八八分法華八講」と見えある。山王講現社にては法華八講を修することあれば、八講七の社といふのである。「七の社」はその條を見よ。

はつつかぐさ 二十日草とは芍

藥(用明天皇) 「二十日草」白樂天の牡丹芳の詩に「花開花落二十日」とありて牡丹の異稱とす。藏玉和歌集にも、「不加見草。牡丹(此花さく日歌二十日也。佐廿日草とも號す)」と見えてゐる。二十草を芍藥といへるは牡丹と誤つたのである。

はつつかん 断末魔の四苦八苦(曾根崎)

はつつかんを見よ。

*はつつく 父尊靈の修羅道拔苦、逆修

の母の壽命(扇八景) 「拔苦」苦患を拔除すること。智度論二十七に、「大慈興一切衆生樂、大悲拔一切衆生苦」。

*はつとくどくち この水は極樂の八

功徳池の水と思ひ(夕霧) 「八功徳池」極淨土にあつて功徳を具有する水である。八功徳は俱舍論に、甘、冷、輕、輕、清淨、不臭、飲時不損喉、飲日不傷、腹、の八つを擧げてある。

はつつけ 間男すればはつつけにかゝ

る(天經帥)

「はりつけ」(磔刑)を約めて「はつつけ」とい

ひ、「はつつけ」といふ。西國譯「萬の文反古卷四、此通りと始末の條に「枯野の藩ぎはぎはと、曝首の露にぎらつき、八付堀きみわらく」とある。「はつつけば」磔刑場である。

*はつつけ 震ふは震の卦、雷百里を動

かすつと、八卦やらもつけやら性根のあるはなかりけり(天神記) 殊に今年は戌の年、大は土に寝るもの、年八卦にかなうた(靈門松) 「八卦易のうらなひの筮木の面に現はれる兆象に八つある、即ち乾☰、兌☱、離☲、震☳、巽☴、坎☵、艮☶、坤☷、である。轉じてうらなひの意にいふ。

はつつけい 平沙に落つるかりがね

し、あるなきかの有様は、聞きに優る八景の、筆を盡して見えにけり(天珎物) 「八景」瀟湘八景をいふ。「瀟湘」の夜の雨の條を見よ。

はつつけん 山伏のばつつけん一

類(漆髯) 「法智」法中の管族の義。同じ道を修する者はいひ、また弟子兄弟の意にいふ。禪林象器箋に、「法中管屬曰法智、或同辨道者。總名法智」。佛頭屋本節用集に、「法智」。甲子祭(加賀孫古淨瑠璃正本 第二に)、「先づ某がはつつけん播州甚野寺に常陸坊海尊とて候へば、御供申し罷り下り彼を頼み申すべし」とある。「はつつけん」の法智を讀む。

はつつきち 百利新左衛門が女房鈴鹿

といふ目口かわきのばつつきといふ者、末座を立つてしやなしやな

と(千正次)

「發才」經はみみ出過ぎた女をいふ。この語現今も開地地方福山市あたりで用ひてゐる所がある。近世風俗志(原守府編 第九編 旭家上)に「發才といふことも京都婦女の優ならざるははつつきといふ云、江戸にオチヤツビイといふ」。

*はつしき 八大童子は八識の道を

導き(井筒) 「八識眼、耳、鼻、舌、身、意以上の六識末那識(意識)の義、阿頼耶識(藏識)といふ。

はつせん 明日からはつせん土用

前、一段とようごら(今宮) 天一天上の五すゐ、八せんま日もなし(天經帥) 「八專」干干にも十二支にも五行を配すれば、六十甲子が自ら五行の二氣の組合せとなる、されば是第六十の内、上干共に同氣の相重なるものが壬子から癸亥までの十二日間に八個あつて、同氣の重ならぬのが四個ある。水水、水土、木水、木木、火土、火火(戊壬子)、癸丑、甲寅、乙卯(丙辰、丁巳(戊午)、己未、庚申、辛酉(壬戌)、癸亥。右の内で同氣重なる八日だけを八專と云ひ、その間に散在する同氣重ならぬ四日だけを間と云ふ。假名懸註解(山路平主住撰)に「八專」壬子の日に入りて十二日の間なり、この壬子の日五行にて云は水なり、それより十二日の内は水にえんある故に疊もの也、乃ち十二日の内に毎日にて無き日四日ある、是を間日と云ふ、間日は何に用ひても忌むことなし、專日と云ふは天地の氣專同なる故專日と云ふなり」。

*はつた 難陀が口よりあつ湯を出

し、毘陀が口より湯湯を出し、産湯をひかせ奉り(烏帽子折)

【跋陀】跋難陀(梵語 Dandata)の略。羅王の名。法華文句に譯して善歡喜といひ。難陀と梵語にて常に摩訶陀國を護るといふ。「なんだ」をも見よ。

はつたくきは 町代夜香が棒ちぎり木、はつたくは葉に霜のばかなき命、南無阿彌陀(安樂切)

町内者の願を形容したはつたくきは、のちうはつたくをまきか、なほ露草葉をもちかけたのである。

はつち 托鉢の道心者はつちばつちと門に立つ(堀川波鼓) 朝な朝なの頭陀の行、はつちばつちも空耳潰し(博多) 國元では人並に武士の眞似をして、鉢坊主の手の内程米も取つたこの梅龍(大經帥) 愚痴無智のはつち坊主同然の御修行(弁箆)

「はち」(鉢)に促聲の増加した語。「はつち」はつちばつち(その條を見よ)とも、托鉢坊主が門に立つて「はつちばつち」と言つて施物を乞ふよりいふ。「はちひらき」の條を見よ。「はつち坊主」は托鉢坊主のこと。「鉢坊主の手の内」とは、托鉢坊主の貰ふにぎり程の米のこと、以て小祿に譬へたのである。

八町三所 坂を登りに草駄天走り、八町三所足ためず飛んで来るは加藤虎之介正清(三國志)

八町を三度に飛ぶ義、走ることの極めて疾きをいふ。

はつてうがき ばつてう笠の簷深き、小家のありくに異らす(聖徳太子)

「はつてうがき」は、徑二尺四寸ばかりの眞竹の箆にて作り、徑二尺四寸ばかりの粗製の笠である。この笠と坂東地方から作りひろまつたよつて坂東といふのが説つたのであらう。現今中國地方でデンバチガサといつてゐる。喜田季莊撰守貞漫稿、笠の部に「眞竹箆を以て造る、押竹の粗也、衣衣日、延寶頃より江戸にて造る眞竹皮笠小形也、押竹も粗なり、時雨雨用也、後大笠雨天のみ用ふ、刺も造りたる徑二尺四寸五寸其重し云々、二尺四寸眞竹箆笠は今名ばつてうがきと云也」



「漁夫釣夫勝人水主等は今の專用之、眞竹ふる下の品箆極麗製なるもの也、笠子笠と云、細も箆細くはら纏をける、又江戸の質籠界は箆笠製を用ふれども、これより形大にして甚淺し、箆ふるある箆笠の淺く大形なるを俗にはつてうがきと名づく。

はつと 一夜泊も法度なり(堀川波鼓) 【法度】法則または制度の義。轉じて禁制の意にいふ。和訓栞に「はつと。法度の音也、書藝注に法則制度と見ゆ」。

はつとはつむ 芝居果に長作が銀持つて来るが、爰へもばつとはつまうし(生玉)

ばつとと勢よく驪頭をまき散すをいふたのである。「はつむ」はその條を見よ。

はつとり 目靈草は服部の、八聲も鐘も霞分行く(靈草) 服部煙草煙草入、煙管の餘計あるならば(錠煙)

【服部】服部煙草の略。攝津島上郡服部村から産出する煙草をいふ。攝津群談・卷十六に「服部相思草。島上郡服部村の田圃に作れり、葉細く葉厚く色黄緑の如くして斑なり、香遠く薫じ香味相共にあらばしくして不飽、好て求之」。靈門松下巻に見つときはきつて服部

育ち、煙草盆引寄せ」とあるは、服部煙草をきかて、服部煙草は香味烈しいによつて「見つきはきつ」といふたのである。

はつね これを御身に贈るぞと、初音といへる鼓に添へ黄金絹布を賜はりて(吉野思信)

【初音】鼓の名。初音の由来につきては吉野思信の文中に説明してある。

はつげ げの絞鞘・象眼鏢(夕鷹) 刀佩の柄に巻く鯨皮にべたべたと大粒の散在したるを形容した語。鯨皮には大なる粒のあるを賣んだものである。鯨皮精製(天明五年刊)に「パツパ沙皮の形は櫻花の如きものなり、パツパはさながら櫻花の風に散りたる如か」を以て、パツパと名付けたらならんか。井原西鶴撰、武道傳來記・卷四、踊の中の似せ姿の條に「筋天鷹鏢のはやり結び、はつげの大小一様に六人深編笠の目に立ちて」。櫻會我女時宗(享保七年刊)三之卷、親の異見きかぬ氣な喧嘩大將の條に、「さわぎ仲間の血氣大盛、はつげの大小しやがかりにさしこなし」。

はつはつ 十善天子の御身にて、我等風情の門に立ち、はつはつと宣言あり(常盤翁)

「はつはつ」を見よ。

はつび 内より土風土煙、はつびに弓籠手・狝狩虎が磨)

【初見草】春には松、夏には卯花、秋には萩、また霜降る頃の菊をいふ。一條良恭撰・藏玉集に「初見草。藪。けふみやが露も色あるはつみ草、きふの。夏の萩と思へば、【初見草。冬菊。しづれふる庭にけふしも初見草、花咲

はつみくさ 初見草なる顔佳草(十二段)

【初見草】春には松、夏には卯花、秋には萩、また霜降る頃の菊をいふ。一條良恭撰・藏玉集に「初見草。藪。けふみやが露も色あるはつみ草、きふの。夏の萩と思へば、【初見草。冬菊。しづれふる庭にけふしも初見草、花咲

きにけり箱やおくらん。十二段のこの女は草の名證しであつて、初見を初見草にいひかけたのである。

はつむ 芝居果に長作が銀持つて来るが、爰へもばつとはつまうし(生玉) 三百兩は亭主にはつむ(靈門松) 油斷召されぬ、人參用あて養生が第一、持合せたばつづまうと、蓋を開き(博多)

この語古來はすむとも書かれ、強く義か。勢に乗つて事を行ふ意にいふ。ふるまふ。色道大鑑に、「はつむ。賊物より出でたる語なり。……凡て強に乘する所に用ふ。和訓栞に、「はつむ。極るより轉るに詞にや、馬にいへる事平家物語に見えたり、常に強などにいへり、或は撥をあり」。

はつむかし 昨日は今日の初昔、世の口に合ふ茶の名所、人ばかり育ちかや(鐘樓三) 互にこひ茶の初昔、私は忘れはしませぬと(卯月調色) 既に茶の湯も初昔、緑も青き宇治山の(用文翁)

【初昔】舊曆三月二十一日に摘んだ茶をいふ。安齋隨筆・卷二十八、茶に極せりの條に「初昔後昔と云ふは、昔の字は廿一日と雖くなり、三月廿一日に摘みたるを初昔といひ、廿一日後に摘みたるを後昔と云ふ」。菓林字のこの文は、茶に初昔といふがあるので、それをいひかけ、そして「口に合ふ茶」といひ、茶の名所「宇治」を氏にいひかけて、文を飾つたのである。

はつむ これはこれ四章駄と號す外道の書、この法を學ぶ者は因果を撥無し來世を期せず(用明天皇)

【撥無し】撥は除の義、無いとして除き過るをい

【撥無し】撥は除の義、無いとして除き過るをい

【撥無し】撥は除の義、無いとして除き過るをい

【撥無し】撥は除の義、無いとして除き過るをい

ふ。地藏十輪經、卷七に、「撥無因果、斷滅善根」。易林、節用集に、「撥無恩餘」也。
*はつめいげつ 兄政若發明者(聖德太子)
「發明靈幽明闇の義より轉じて、恰例、敏聖、利益の意にふ」。

はつめいげつ 徒歩でこれ程行くことも、初めい月やいもあらひ(延慶)
〔初名月〕舊曆八月十五夜の月をいひ、九月十三夜の月を名月といふに對する稱である。また九月十三夜の月を名月といふに對して、八月十五夜の月を芋名月といふ。こゝの文は初名月や芋名月の芋を一口(地名部)について見こつてつけたのである。口次紀事(延寶年中感)八月十五日の條に「今夜地下長障亦實明月、各羨芋而食之、故俗稱芋明月也」。

ぼつもくてう 閻魔卒三魂を縛して關樹下に至る、二鳥棲んで掌る、一を無常鳥、二を拔目鳥と名づく(實古傳)
〔抜目鳥〕冥土に棲める鳥の名。蓋し鴉をいふたのだといふ。閻魔卒三魂を縛して云々を見る。

*はつともゆひ 我が親と初元結の我が夫、犂と舅の挨拶(卯月紅蓮)しらの姫はお國腹、金水引の初元結まだ十三歳の稱禧も(丹波與作)
〔初元結〕在時元服の時に髪を結んで鬘を結んだことをいひ、轉じて元服のことといひ、若々しい結髪をいふ。丹波與作のこゝの文は、蓋女に行づくに初めて髪上げしたことをいふ。

*はて 氏より育ちが恥かしい、ばではすはなる身に染り(永明日) ハテばでな人様ぢや、わしらがやうな者が乗つた船は目に立つ故、どれ

に限らず皆見えんす(二枚繪)
「葉出の義であらう。質素の反對。華美。けばけはして目に立つこと。物好き」。

*はとうりわんおん 馬は馬頭觀音の神通力ある故に、小栗判官兼氏の自然佛智に感諾し(小栗判官)
〔馬頭觀音〕三面八臂にして蓮臺上に坐し、頭上に馬頭を載る觀音である。佛像圓容に、「馬頭觀音、此尊應利益の甚深なること、馬の但水草を念して餘は所知無きが如しと云こゝろなり」。

*はとのかひ 若君のまだ乳呑まう飯食はうん、義經の再誕とはこのかひの僧正に誰かされ(最明寺殿)
路頭にさまよひ、或は騎り、鳩のかひ、追刺、押入、こまのほひのれだりとり(娥) きやつは何處の鳩のかひ、人の妻子に髪切らせて連れ行くは、扱はおのれは閻男(三世想) 宿禰氣色を損じ、これ物取、鳩のかひの偽におどされ、さやうの御返事この檢非違使は得申さじ(用明天皇)

〔鳩の飼〕鳩を吐いて財貨を食つて世を渡るもの、即ち詐欺師、妖巫の類である。人偷重寶記(元祿九年刊)卷之五に「鳩の飼として順禮をうたて門々をあるき、女ばかりのさびしさうなる所には茶煙草を所習し、それより入り入、四國西國をめぐりておそろしき事殊勝なる事たりまでかたりて錢銀をとる。……照野の新宮本官の事をかたりては、鳩の飼料としんでこれと錢をとししより、鳩の飼といふ名はつたなり」和訓栞に、「はとの

かひ。妖巫の類をいふ、八幡神に託し鳩の飼料をまきほさる儀に、或は鳩の卵と書けり」(貞丈雜記・卷十六、神佛類の部に「はとのかひ」とは法度の害なり。正道なる事をなす人をたふらかす故、天下の法度の害に成るなり」との語は非である)。

*はとのつゑ (孕常態) 日本武尊(濳體)
〔鳩杖〕杖の把手に鳩の形を附けたもので、老人の携へる杖である。蓋し鳩は賢い鳥なることよつて、賢い義を取つたものであるといふ。後漢書禮儀志に、「八十九十有加鳩玉杖、長尺端以鳩鳥為飾、鳩者不噉之鳥也、欲云人不知恥」。日本書紀始に「馳も今年米麥の、田知見んと鳩杖」とあるは、米麥八十八歳(米麥にひひかけて、老人の鳩の杖にいひつけたのである)。

*はともね 頭は赤熊踏脊中、鳩胸に顔は猿(薩摩)
〔鳩胸〕鳩尾骨助骨が中肋に突出して、鳩の胸の如くなる胸をいふ。

*はな 落人置かうとも打破つて棄てうとも、これこの鼻がままだとあり(今川了俊) このこのはなは新酒の酔粉れ、積る恨を申し始め候(露門松) 蒲團ばりしてナ小姓衆を乗せて、海道百里をばなでやる(堀川波波)

〔鼻自分〕この鼻がなど、自分の鼻を指して自分の鼻をいふ。俚言集覽に「鼻様。余と云事を自指してか云、鼻はばかりも云、鼻字は古の鼻字なり、余、鼻といへるは鼻といふ俗語にかなへり」。

〔はなで〕のはなは鼻歌の略で、馬土が小室爺などの眼を鼻に掛つたため謔ひのみであり、馬を追い遣つて行くをいたうたひである。「さても見事な老萬馬や云々」と見よ。

花軍
一馬の帝の花軍及び風流陣の條を見よ。
*はないろ やりてのすが太夫様(花色繡子の前巾着袋體) 若しやと目もばな色の、長靴頭巾しよんぱり(女腹切)

〔花軍〕はなだいろ(無色)に同じ。薄き藍色。和訓栞に「はなだ。月草にて染るをめて古くは花也といへり、はなだ草は月草の異名なり」。

はなろさぎ 時代の金襴・鶴菱、たすき、花兜、窠に霞(丹波與作)
〔花兜〕角の内に頬が花を衝へた紋ある名物裂はなうつば
龜甲・輪蓮花
〔花〕五人兄弟
〔靱〕五段習技
〔舞の本〕にははなうつばとあり
こゝの紋給が載つてゐる

花・お札 愛宕 参りの花お札、風呂敷包下人に持たせ(女腹切)
山城國島野郡の西部にある愛宕山の絶頂愛宕神社に奉詣して、持ち歸る花枝と息火災の御札とをいふ。愛宕神社に奉詣した歸りに、襦袢神符を結び附けたものを土産として近隣に配り、又は家が家の荒神へも供へて火難除けとなる。山城所紀行(正徳四年刊)卷十一、「愛宕山の條に、「殿坂五十町、曲崎齋河老少挽禰裡、深喜利生和、或暫回禰札、



〔ぼつうなは〕

願家門禿禿、或持三搖與、欲三願里作、賀云々。

はなかいらぎ 花かいらぎと散る花と、ざんざめいたる掃庭の(薩摩歌) 糠味増汁のはなかいらぎ、柄糸きれて漣や、昔ながらの草履(取三國志)

「花梅(花梅)鱗皮の地粒すべてあき中に、大粒に花の如くなる形のもの交り、其色至つて白きを上品とする。この花大方櫨の形ともいふべけれども、分明に花の形をなせるのではなからず、べたべたとした大粒である。雍州府志(貞享三年刊)土産門、鱗皮の條に、「其粒相齊者、刀柄、是謂兩鱗。又控間交花鱗狀者、謂梅花鱗。」

はなかつみ 「あきかのぬまのはなかつみ」見。 **はなかつみ** 鹽貝に花鱈、書出しはなかつみ、暫らく時こそ移りけられ(水朔日)

「花鱈(花鱈)鱗節を花鱈のやうに薄く細かに削つたもの。この文は、鱈削きに書出をいひかけたのである。

はながみぶくろ 鼻紙袋(曾根崎) 待ておのれどすると、鼻紙袋(文)を入れ、ぐるぐるまきし紙捲(二枚捲)

「鼻紙袋(鼻紙袋)ともいふ。襖に挟み持つ函迫のやうなもので、革或は絹を以て片蓋を縫ひ、その内に紙、小遣錢、懐中藥、印判、耳肥子など、ちよつとした携帯必需品を入れたものである。雍州府志(貞享三年刊)七、土産門下、服部部、細物の條に、「以三三或綿、綿片蓋、其内盛三九散藥、或懸三耳肥子等物、與鼻紙合而懷之、是謂鼻紙袋、古疊紙之遺風乎、折或鼻紙亦有納鼻袋一者、と孫俗小片紙一摺紙、今專謂鼻紙」。西鑑撰、懐前御狂言(寶永二年刊)卷之一、心中立切た刺刀の條に「鼻紙入ふくまき三つ、中一つは空行力のめり、あふまでと書ちつてあり、まがね五粒、中一小馬引錢一文あり、外郎一包、一過上人の名號、芝居のばん付め見え申候。」

はななくらう 卯月八日の花供養、佛法流布の因縁なり。(釋迦)

「花供養(花供養)流布の因縁なり。釋尊の降誕日即ち四月八日を以て行ふ法會である。種々の草花にて莊嚴せる花柳堂を造り、その内に右手は天を指し左手は地を指して、天上天下唯我独尊と叫ばれた姿の釋尊坐佛を安置し、甘茶を酌じて佛に灌ぎ、禮拜供養する法會である。日次紀事(延寶年中成)四月八日の條に「今日灌佛會、古祭業亦有此儀、凡諸寺院修灌佛會、以品花、節小堂、是謂花堂、其内安小釋迦像、而灌甘草等香水也、黃柏山所設之花堂殊發美、京俗今朝插花柳枝并繡花於三竿頭、高遊之而供佛。」

はなじり 二つ道具に舞鶴の鍔印先に押立て、筋違橋の見附にてはなじりにはたと行逢うたり(扇八景)

「鼻白(鼻白)腰懸して懸したとき鼻のじり」といえるにまつていふとぞ。俳言集覽に「鼻白(夏山雜談)古き單物語にハナシロにつきあひたりとあるは、酸味方思ひよらず出合て、互ひにびつりして懸したことをいふや、鼻白は懸したる事なり、懸すれば鼻の白くなるなり、源氏物語、おくれがちに鼻白める人多かりと見えたり。曾我退八景のことに「思ひかけず折悪く行き違ふ」との意に用ゐられたのである。

はなぞろ 花を揃へて花ぞろの、色

「花梅(花梅)鱗皮の地粒すべてあき中に、大粒に花の如くなる形のもの交り、其色至つて白きを上品とする。この花大方櫨の形ともいふべけれども、分明に花の形をなせるのではなからず、べたべたとした大粒である。雍州府志(貞享三年刊)土産門、鱗皮の條に、「其粒相齊者、刀柄、是謂兩鱗。又控間交花鱗狀者、謂梅花鱗。」

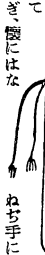
であかりの夜見世かや(吉岡染) 「はなぞろ」(花柳)の略。數多の美女が揃つて遊ぶこと。 (松風村雨東帯鑑)

はなぬり さくらが色に花ぬりの、吉野漆の塗師屋時繪屋楡皮屋(用明天皇)

「花梅(花梅)鱗皮の地粒すべてあき中に、大粒に花の如くなる形のもの交り、其色至つて白きを上品とする。この花大方櫨の形ともいふべけれども、分明に花の形をなせるのではなからず、べたべたとした大粒である。雍州府志(貞享三年刊)土産門、鱗皮の條に、「其粒相齊者、刀柄、是謂兩鱗。又控間交花鱗狀者、謂梅花鱗。」

はなねぢ 荷物に附けしはなねぢ引拔き(堀川波鼓)

「鼻括(鼻括)狂時馬方が馬の鼻を制するに鼻をねぢる用具で、長さ一尺五寸ばかりの繩を黒と朱との段々塗してある。これを以て人と毆打などもした。武家名目抄、鼻括部には「ねぢ」。櫻雲我女時宗(享保七年刊)瀨の異見きかぬ氣な喧嘩大将の條に「はなねぢ」に「さば」



「花梅(花梅)鱗皮の地粒すべてあき中に、大粒に花の如くなる形のもの交り、其色至つて白きを上品とする。この花大方櫨の形ともいふべけれども、分明に花の形をなせるのではなからず、べたべたとした大粒である。雍州府志(貞享三年刊)土産門、鱗皮の條に、「其粒相齊者、刀柄、是謂兩鱗。又控間交花鱗狀者、謂梅花鱗。」

はなのぼうし 積る迷ひも、疑ひもひららかなるはなの帽子にて、頭つむし柔らかなる(龜徳太子)

「花梅(花梅)鱗皮の地粒すべてあき中に、大粒に花の如くなる形のもの交り、其色至つて白きを上品とする。この花大方櫨の形ともいふべけれども、分明に花の形をなせるのではなからず、べたべたとした大粒である。雍州府志(貞享三年刊)土産門、鱗皮の條に、「其粒相齊者、刀柄、是謂兩鱗。又控間交花鱗狀者、謂梅花鱗。」

はなのもと ともより一學や(女)

「花梅(花梅)鱗皮の地粒すべてあき中に、大粒に花の如くなる形のもの交り、其色至つて白きを上品とする。この花大方櫨の形ともいふべけれども、分明に花の形をなせるのではなからず、べたべたとした大粒である。雍州府志(貞享三年刊)土産門、鱗皮の條に、「其粒相齊者、刀柄、是謂兩鱗。又控間交花鱗狀者、謂梅花鱗。」

「花梅(花梅)鱗皮の地粒すべてあき中に、大粒に花の如くなる形のもの交り、其色至つて白きを上品とする。この花大方櫨の形ともいふべけれども、分明に花の形をなせるのではなからず、べたべたとした大粒である。雍州府志(貞享三年刊)土産門、鱗皮の條に、「其粒相齊者、刀柄、是謂兩鱗。又控間交花鱗狀者、謂梅花鱗。」

「花梅(花梅)鱗皮の地粒すべてあき中に、大粒に花の如くなる形のもの交り、其色至つて白きを上品とする。この花大方櫨の形ともいふべけれども、分明に花の形をなせるのではなからず、べたべたとした大粒である。雍州府志(貞享三年刊)土産門、鱗皮の條に、「其粒相齊者、刀柄、是謂兩鱗。又控間交花鱗狀者、謂梅花鱗。」

「花梅(花梅)鱗皮の地粒すべてあき中に、大粒に花の如くなる形のもの交り、其色至つて白きを上品とする。この花大方櫨の形ともいふべけれども、分明に花の形をなせるのではなからず、べたべたとした大粒である。雍州府志(貞享三年刊)土産門、鱗皮の條に、「其粒相齊者、刀柄、是謂兩鱗。又控間交花鱗狀者、謂梅花鱗。」

「花梅(花梅)鱗皮の地粒すべてあき中に、大粒に花の如くなる形のもの交り、其色至つて白きを上品とする。この花大方櫨の形ともいふべけれども、分明に花の形をなせるのではなからず、べたべたとした大粒である。雍州府志(貞享三年刊)土産門、鱗皮の條に、「其粒相齊者、刀柄、是謂兩鱗。又控間交花鱗狀者、謂梅花鱗。」

「花梅(花梅)鱗皮の地粒すべてあき中に、大粒に花の如くなる形のもの交り、其色至つて白きを上品とする。この花大方櫨の形ともいふべけれども、分明に花の形をなせるのではなからず、べたべたとした大粒である。雍州府志(貞享三年刊)土産門、鱗皮の條に、「其粒相齊者、刀柄、是謂兩鱗。又控間交花鱗狀者、謂梅花鱗。」

「萬句の連歌をぞ始めたりける」と見え、寛政波集序に「久しく空の上のもてあそび、花のもとにたふれとなれり」と見え、庭訓往來二月十三日の文に「花下好士」と見え、(和訓栞)に「自然菊宗祇法師連歌をもはら興行し花の本と稱す」とあれども此下の稱は宗祇に始まつたものではない。宗祇は連歌に於て天下第一と稱せられ、勅を奉じて新筑波集を撰し、朝廷から花の下の號を賜はつた。

＊はなむけ (三世相)

「馬のはなむけ」の義である。昔旅立つ人を送るには、その人の乗つた馬を行く方へ向けて別れを惜み、物などを贈る習慣であつた。それより轉じて饗別をいふ。土佐日記「十二月二十三日の條に「これぞ正しきやうにて馬のはなむけしたる」。

はなむらさき 三の君花紫を戴いて、びらりしやりの町風も、帽子に漏る衣の香の(酒香童子)

「花紫紫帽子のこと」にいらたのである。「むらさきはうし」を見よ。

＊はなふ 殖生にかくまひ参らする

(反魂香) 蘭も桔梗も刈取つて、賤が殖生の冬籠(松風)

「殖生」殖生小屋の略。「殖生」は泥土のある所をいふ。「植」は和名抄に「釋名云、土黃而細密曰植」と見えてゐる。「殖生小屋」は荒壁の隙屋をいふ。萬葉集「卷十一」の歌に「をちかたの赤土の小屋にこまめふり云云。平家物語「卷十」の歌に「旅の空殖生小屋のちぶせき、故郷いかに戀しからむ」。

はにやすぢじん 此地の底にまします埴安地神にも見放され参らせしと(振袖始)

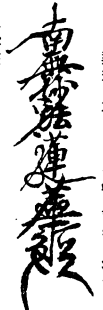
「埴安地神」土神をいふ。日本書紀神代紀に

はなむけ — ばはん

「土神號埴安神」。

はねだれもく 法力忽ち金色の刎題目と現はれて雲中に見えける

(刎題) 經名・妙法蓮華經を題目と稱するものと日蓮宗に創まり、それに南無を添へて(刎題)と云ふ。



〔くもいだねは〕

各字畫の端を撥ねたのを刎題目といふ、但法は省せぬとこの字のみは撥ねてない。

はねもれゆめい 牛をうかがいけぬ牛の角、はね元結のぼうがけいわけ、二十を頭に十人許り(餘暇天皇) 染むればそまる黒髪、艶は鳥のはね元結(井筒)

「染元結」若盛りの婦女の結髪の飾にかける元結であつて、丈長紙の兩端に針金を附けて、その結んだ端を牛の角のやうに上に反したるもの。西鑑雜記「一、珊瑚珠の前髪押へ、針金入の鬘を掛けて」。

＊はばかる 身振ばかりは男を磨く、町いづばいにはばかつてこそ歸りけれ(天細鳥)

「はびこる」の體のひびろがる。調歩する。藤原俊賴撰・故木葉歌集に「佛の御舌は廣く長く、卯のとし都萬夫天座役者評判(元祿十二年刊、安樂坊評)鵜渡千壽を評した文に「老居一はいにはばかる程大津な藝、もつたよぐちやしらす」。

＊はばき ばつしと鋸打は、はばき切羽も一時に碎け散るべう見え(會稽山)

刃鐮の轉であらう。既中金をいふ。刀鋸の鋸元を固める金具の稱。

＊はばき 左の脚に銀の金具にはばきを入(會我八景)

「はばき」は「盤」の義。既中。脚絆。大卒記「卷五、大塔宮熊野野の隊に「いつ習はせ給ひたる御車ならども、あやしげなる單皮脚中草鞋を召して」。

＊ははき ばつしと鋸打は、はばき切羽も一時に碎け散るべう見え(會稽山)

刃鐮の轉であらう。既中金をいふ。刀鋸の鋸元を固める金具の稱。

刃鐮の轉であらう。既中金をいふ。刀鋸の鋸元を固める金具の稱。

＊ははき 左の脚に銀の金具にはばきを入(會我八景)

「はばき」は「盤」の義。既中。脚絆。大卒記「卷五、大塔宮熊野野の隊に「いつ習はせ給ひたる御車ならども、あやしげなる單皮脚中草鞋を召して」。

＊ははき ばつしと鋸打は、はばき切羽も一時に碎け散るべう見え(會稽山)

刃鐮の轉であらう。既中金をいふ。刀鋸の鋸元を固める金具の稱。

＊ははき ばつしと鋸打は、はばき切羽も一時に碎け散るべう見え(會稽山)

刃鐮の轉であらう。既中金をいふ。刀鋸の鋸元を固める金具の稱。

＊ははき ばつしと鋸打は、はばき切羽も一時に碎け散るべう見え(會稽山)

刃鐮の轉であらう。既中金をいふ。刀鋸の鋸元を固める金具の稱。

＊ははき ばつしと鋸打は、はばき切羽も一時に碎け散るべう見え(會稽山)

刃鐮の轉であらう。既中金をいふ。刀鋸の鋸元を固める金具の稱。

＊ははき ばつしと鋸打は、はばき切羽も一時に碎け散るべう見え(會稽山)

刃鐮の轉であらう。既中金をいふ。刀鋸の鋸元を固める金具の稱。

＊ははき ばつしと鋸打は、はばき切羽も一時に碎け散るべう見え(會稽山)

刃鐮の轉であらう。既中金をいふ。刀鋸の鋸元を固める金具の稱。

＊ははき ばつしと鋸打は、はばき切羽も一時に碎け散るべう見え(會稽山)

刃鐮の轉であらう。既中金をいふ。刀鋸の鋸元を固める金具の稱。

＊ははき ばつしと鋸打は、はばき切羽も一時に碎け散るべう見え(會稽山)

刃鐮の轉であらう。既中金をいふ。刀鋸の鋸元を固める金具の稱。

＊ははき ばつしと鋸打は、はばき切羽も一時に碎け散るべう見え(會稽山)

刃鐮の轉であらう。既中金をいふ。刀鋸の鋸元を固める金具の稱。



【草子母】

る。西遷一風襲伊達妻五人男(實永四年刊)五之巻に、阿波座屋の染物屋羅金文七が己が母を呼掛けた詞に「申し母じや人、文七でござる、今頃いづ方へ御出心元なしと見えてゐる。

ははみた お姫様にはお果なされし母上様の御菩提のためとあつて、ははみたははみたと申す壬生大念佛を修行なさるる(壬生大念佛)

「はらみつた(波羅密多)」に「母見たをきかせたので、はらみつたは」その條を見よ。

ははや 忝くも天照大神天のかご号羽羽矢を以て惡神なしづめおはします(槍狩)

「羽羽矢」鳥の羽ではない。日本書紀神代上に「倉日、天國玉之子天稚彥是壯士也、宜と試之、於是高皇產靈尊賜天稚彥天鹿兒弓及天羽羽矢。以遺之。釋日本紀に「天羽羽矢謂「羽々矢者、以鳥羽波久矢也、加重點書言其羽矢衆多也」。

ははん ばはんの海賊乗せ、入鹿公の御首はこの有風が討つ約束(天織冠) さては海賊ばはんぶねふな(用明天皇) ばはんとやら馬糞とやら、待て待て遣らぬと跳り出る(唐船嘯)

「八幡」八幡船の略、海賊船の意にちひ、また「ははん」を海賊の意にちひ。南海通記豫州能島氏侵大明國記の條に「この時我國の賊船各八幡官の機を立て洋中に出で、西蕃の市船を襲ひ掠めてその財産を奪ふ故に、その賊船を稱して八幡船と呼也」と見えてゐる。蓋し鎌倉の初期から室町時代にかけて、我が邦人が支那朝鮮の沿岸を寇略したるを彼の國で倭寇といつた。その衆數十人から數千人に

及び、約七八百石積の和船に八幡大菩薩の標旗を掲げてゐたによつて、徳國人がこれを八幡船と稱したのである。倭寇は朝鮮沿岸にはじまつて遼東・山東・江蘇・浙江・福建・廣東に及び、支那東海岸は殆んど皆この害を被つた、中にも浙江が最も甚かつた。倭寇の最も勢力があつたのは明の世宗の嘉靖時代であつて、嘉靖四十二年に明將戚繼光、俞大猷に擊破されてからは勢頓に衰へ、僅に臺灣に據つて餘喘を保ちつつ次第に消滅した。「はひかへす」の語の古くは天正十七年の松浦文書の中に見えてゐる。饅頭屋・節用集・人倫部に番船としてあるは「ははん」を「番船」の義としたのであらう。巢林子は、「ははん」を海船船または海賊の意に用ひたまでである。馬船新今國性齋のこの文の、「ははん」馬義は馬府官を音の相似よりもちつて罵つた語である。

はひかへす 「はふ」を見よ。

はひひて やい父様はお留守か、ひとり女子がはひひでなりや、お客が一人あつてもアア不都合な事ばかり(堀川波鼓) 彼奴がはひひでに着うせた布子があらう(歌念佛) 跡を濁さぬ水の面、はひひでの蛙二合半、首にかけたる杜鵑(藤原歌) はひひでのわがが暗屋を覗く如くにて、肩に手なかけ唄祭文(虎が聲)

はひびき 銀座に長長使はれ、駕籠の純漢の意。

乗物ははいはいひ吹(薩摩歌) 「灰吹頭分に宣める鉛中から銀を採取する方法を灰吹法といふ。灰吹法によつて銀鏝を吹き分けて混合物を取り去つた銀を灰吹銀といふ。巢林子のこの文は、細鏝乗物の掛懸はいはいに灰吹をいひかけたのである。

はひよせ 南無三寶火が消えた、サア房様の灰寄ぢや(重井簡) 「灰寄(死者を火葬して其骨灰を拾ひ集めること)をいふ。重俗佛事編・卷四に、「火葬には必ず灰寄あるべし、古傳是世尊茶毘の遺愛なり、涅槃の體林には七日にして薪盡るが故に、第八日に當て舍利を拾ふを、人間天上及閻官に分つて塔を建てて供養す、今世俗も物之骨を拾うて墓場に收む」。

はふ 破風を蹴破り黒雲に入りて失せ候(反魂香)

はふ 折角呼寄せた母様までげうて歸らうとや(川中島) 村中に立つたる高札、何とは知らずはひひ取つて參りし(唐船囃) 世繼様もばひ返りし、お二方とも私が屋敷に忍びせ置き參らせしが(花符) 「らふ(奉)の」の略された語。空穂物語・兼明に、よりあきらかまてなむはひ取りて侍りと申し給へば「はうて」は奉ひての音便。「はひ取つて」は奉ひ取りての促音便。「はひ返りし」は奉ひ取りての促音便。

はぶく 雲井に羽ぶき羽扇を上げ、招く手風や神風の(源義経) 「羽振(羽扇)するをらふ。「ふる」(振)を古くは「ふく」て云うた。萬葉集に「山振」と書いて「やまぶき」とよみ、古今集卷三、歌歌の部に

にも「五月まつ山ほととぎすうちにはぶき、今も鳴かなむ去年の山聲」と見えてゐる。
はぶくら 手先さがりに射損じて、誰が刈積みし稻巻に、はぶくら込めてすばと立ち(藤丸) 思ふ矢盡も過つた、法眼が胸板はぶくらせめてすばと立つ(吉野忠信) 矢の羽をいふ。東鑑に「羽」を「はぶくら」といふ。蓋し矢は羽が附いて飛れてゐるからである。羽損しといふたのであらう。判官物語・土佐原堀川へ寄する條に、「きさんた左手のたちうちをはぶくらせめてつと射通す」。北條五代記・昔矢軍の條に「鈴木左京亮はすづれたら強まず、先登に進み彼が放つ矢はぶくらを強まずといふことなく、怒ち射殺す所の者多し」。

はぶさうびくのじやうるり 「ほぶさうびくのじやうるり」を見よ。
はぶし 兩方互に四つ手に組み、はぶしにどうと轉ぶと見えし(弁簡) 「はひひし」遺伏の約、倒れて四つ這となること。現今も中國地方にて、這ふ形に思つてゐるを「はぶさう」といふ。
はぶし 羽節を張つてげつとたち(國性齋) 「羽節」羽の豊る。關。

はぶりこ 祝子宮奴棒突きちらし(生世) 「祝子」神主をいふ。蓋し災禍をはぶりやる人として手廻り出た語であらう。
はへ 手廻りもよく幾はへか庭に五つのたなつ物(香庚申) 「襪」後などを稱むに、正方形に並列して其上に積重ねること。和漢三才圖會・卷十五、倭字大略の條に、「襪」凡材木及米俵積層皆曰

はま **はませり** 日が暮れると濱せ

はま **はませり** 日が暮れると濱せ **はま** エイ錢取つて濱へ行く様な者ぢや御座せんとてひんとする(最明寺殿) 日が暮れると濱せせり(夕霧) 小めろのりんは十文そればはまなみさざなみや、志賀様たつた二文か(女腹切) 年々とも、あ二年、下宮島へも身を仕切り、大阪の濱に立つても此方様一人は養うて(倉途舟脚) 「舊大阪の濱(河津)にある納屋の陰あたりは總縁(その條を見よ)の出稼する場所である。「はまなみ」を見よ。
「はませり」とは濱邊をうろつて総縁を買つて載れるをいふ。
「濱に立つ」とは、惣縁となつて濱側に立つて往來の男を見かけて袖を引くをいふ。
「濱せ」とは、濱に立つ總縁を買ふ料十文たるにより、それ並の十文をいふ。「はまなみ」をも見よ。長町女腹切のこの文は、濱せとさなみと同物脚語とつけ、さなみは滋賀の枕詞によつて、志賀様と人の名としていつづけたのである。

はま **はませり** 日が暮れると濱せ **はま** エイ錢取つて濱へ行く様な者ぢや御座せんとてひんとする(最明寺殿) 日が暮れると濱せせり(夕霧) 小めろのりんは十文そればはまなみさざなみや、志賀様たつた二文か(女腹切) 年々とも、あ二年、下宮島へも身を仕切り、大阪の濱に立つても此方様一人は養うて(倉途舟脚) 「舊大阪の濱(河津)にある納屋の陰あたりは總縁(その條を見よ)の出稼する場所である。「はまなみ」を見よ。
「はませり」とは濱邊をうろつて総縁を買つて載れるをいふ。
「濱に立つ」とは、惣縁となつて濱側に立つて往來の男を見かけて袖を引くをいふ。
「濱せ」とは、濱に立つ總縁を買ふ料十文たるにより、それ並の十文をいふ。「はまなみ」をも見よ。長町女腹切のこの文は、濱せとさなみと同物脚語とつけ、さなみは滋賀の枕詞によつて、志賀様と人の名としていつづけたのである。

はま **はませり** 日が暮れると濱せ

り(夕霧)

濱納屋邊をうろつて辻君を買って快樂を賣る。こと。「濱」は「はまなま」を見よ。「せり」は「せれる」を見よ。

はまぢ 大鯛・小鯛に名吉・鱧・鯉・鱈・はまぢ・鯉(天鼓)

「飯間西地方にて鯛の一二尺許のものをう。うなだ。

はまなみ 「はま」を見よ。

*はまなや 男と女子と喧嘩して、

濱納屋の下で組んづ轉んづしてあつた(歌念佛)はしげしの暗屋へ下り、後には濱の納屋の蔭一本立にて候(二枚繪)

「濱納屋」濱邊(河岸)にある物置屋をいふ。貞享から享保の後までも大阪の濱納屋の邊は、辻君が夜陰に乘り往來人の袖を引き、納屋の蔭に隠れて出稼する所であつた。濱納屋の邊をただ濱(その條を見よ)とも云うたのである。「そうか(總縁)の條を見よ。」「男と女子と喧嘩して云云」とあるは、辻君が男と狼發行爲に及んでゐるのを喧嘩と誤認したものである。「濱の納屋の蔭一本立」とあるは、濱納屋の蔭に立つて往來人の袖を引き、情を賣る哀れな氣配の身の上をいうたものである。

世間煩氣(江島其儀撰、享保二年刊)巻之五にも、「夫に見はなされて今日の命をつなぎかね、夜歌うたらうて濱側の納屋の蔭からそつと出で、往來の袖をひかへて十文づつに情の切實云云」と見えてゐる。

はまやき 羊の濱焼・牛の蒲鉾(國産品)

「濱焼」獸魚の類を鹽漬の鹽を焼く釜の下に掛けて蒸焼にしたもの。

*はまゆか 青海波と名付けたる一

はまぢ — はらか

吸九盃の大砲、濱床に飾らせて既に酒宴ぞ始りけり(用明天皇)

「濱床」帳臺の類であつて、四面に洲濱の形あるよりの名であるといふ。おもに后宮におまじし所として用ひらる。雅亮裝束抄卷一に、「まききの宮などの濱床あり、高さ二尺許、四つにまきし合せておく、黒漆金物打ちたり、その上にまきしするたる縹緞二帖を北南に敷く、兩を枕としてみたり。

*はまる 人かと思つてはまつた、涙がこぼれて口惜しい(生玉) これは

扱松かと思つてはまつた(反魂香)三五平様であらうとは尤も氣のつく筈もなく、妾やはまつたは是非もなや(薩摩歌)

「扱」扱は「食」の轉義であらう。うづばいといはれる。騙される。計略に陥る。心中萬年草中巻に、「京の香をはめだてしたら、返報を食はう用心せよ」とある「はめ立」も「騙す意、蓋しうづばい食はす義であらう。

はまをき 「物の名所によりてかはるやう」を見よ。

はみかへる 曾根崎の手も切れば本人間の上上と、聞けば跡からみかへる、そも如何なる病ぞや(天網島)

「病」再發する。ぶりがかへる。和訓栞に、「はみかへる。病にいふは食復の義也、字彙に「はは病重發也と見えたり、新撰字鏡にかへりやみ」とあり。合類大節用集(享保二年刊)肢體門に「瘰癧」字彙・病重發也。

はみだし 二口屋のはみだし猪熊の革柄(女腹切)

はみだし 二口屋のはみだし猪熊の革柄(女腹切)はみだし猪もかみさびて、こり詰りし師走の果、胡散らしく吉田屋の内を覗い

て(夕霧)

「食出」食出器の略。鞘・柄の上に僅に食出てゐる錫であつて、短刀に限る。「ふたくちや」をも見よ。

*はむしや 誠に將軍家の御連枝、葉武者などの逃るやうには候まじ(吉野忠信)

「端武者」端侍に同じ。はむしむらひを見よ。

はもく 「離たる馬目云云を見よ。

*はもじ 横幅廣く結ばれしは此月帶の御祝儀、言のほもじさつつましき、袖かき合せ着座ある(最明寺殿) 箱王は初事の傾城に顔見られ、くわつと紅葉のほもじに(加増曾我)

「はづかし」胸の文字詞である。文字詞については「すもじ」の條にも述べて置いた。

はや 雄鷹の香取丸にて甲矢を短ぎ(百合笠)

「甲矢」おとや「乙矢」の對。初矢の義。一手二本の矢の如初に射る矢。

はやおひ 三條堀川まで早追の通しに來ました(舞臺本手記) 窪田で且那をおろしておつて馬を取りに行くと、早追ほどに追うて來る(舟波與作)

「早追」馬または界繩を飛ばして晝夜兼行を急ぐ使者。

はやす 丹後の生鱈上方にもめじろと申してあるげなれど、其美味さが何として、殊に切りおうけのあること、少し薄目にはやせば、片

身で六十人のおかずは覺えがござんす(浦島)

「生」切るといふを思へて、反對に「はやす(生ずる)義」といふ。切る。保元物語卷三、新院桐親沈の條に、「その後は桐丸をもちやます、御髪を剃らせ給は、桐姿を並し」とある。「はやす」も切り給はずの意。なほ浦島年代記のこの文の「切おうけ」は、切出の意で、「おおうけ」はおおげ(大)で、大盛なことをいふ。

*はやて 裸身軽く逃足も、はやての風に雲澄は、山に飛入り谷を分け(百合笠)

「疾手」古くは「はやち」といふ。ち、ち、は風の義である。俄に烈しく吹く風。

はやみち ばや道下げたる袋より漢竹一管取出し(源義經)

「早道」財布。離通に「有合せたるぞ幸ひと、逸道持ちあけて離らすとせける」と、但言集覽に「早道」金銀を懐中する袋なり。

*ばら 此處彼處にて召捕つたる海賊ばら(博多) 彼奴原それ追拂(博多)

人に係る名詞に添へて一人ならぬを示す接尾語。例。等。

はらか 駿河の國平賀の三郎と名乗つて、……、やさしやしほらしや、はらかと聞けば大内の、御垣に立てる車切り(加増曾我)

「腹赤」鰯といふ。公事根源、元日節會の條に「腹赤の鰯とて魚を筑紫より奉るなり、昔は鰯を節會などに供しけるにや、腹赤の食味とてくさしたるを皆取渡して食たり、景行天皇の御宇筑紫の國宇土の郡長曾に海人はを釣て奉る、其後聖武天皇の御時天平十五年

正月十四日大宰府より是を奉ける、是よりして年毎の節會に供すべきよし定られたるなり、腹赤とはますと申魚の事なり。巢林字のこの文は、「平賀をもちつてはらから」とうて、大内の公事に腹赤の費を獻するによつて「大内の御垣」といひつづけたのである。
*はらから 近江の兵衛が卯の花、山吹はらからの美女(天智天皇)
自腹の義、同胞、兄弟姉妹。

*はらまき 斯波左衛門義將は腹巻に小丸まき(靈女)
〔腹巻〕鏡の一種。昔は腹巻の上に大鏡を着けたのであから、袖無く、草摺も前三枚下り後四枚下りにして、能く身にしまふやうに入れり、背で合せてたので、その隙へ背板を入れて、後方から来る矢などを防いだ。後世になつては腹巻に鏡の袖をつけて鏡の代用とした。貞丈雜記に「腹巻は背の方に合せ、其すき間を背板にて塞ぐなり、背板なきもあり、今昔わり具足など云ふなり、腹巻には袖なきものなり、袖付くる時は鏡の袖を取りて付くるものなり。近代は腹巻に袖あるもあり。平治物語・待賢門の條に「細の直垂に黒絲綴の腹巻に左右の小手さして」、源平盛衰記・宇治川合戦の條に「那實の腹巻に袖付たり」、太平記・笠置軍の條に「さかさま鏡の下に腹巻か鎖かを重ねて著れば」と見えてゐる。

はらみく ひよつと變るな變らじの、其言の葉ではらみくや、連歌師の山様と(百日曾我) 房は憂き身のしなじなを心一つにはらみく、の、脇が勇めば力なく、片眼で笑ひ片眼には涙を包む(重井簡)
〔孕句〕詩歌俳諧などの腹案句。百日曾我のこの文は、子を孕むの孕むに孕むをひかけて、その縁語なる連歌師につづけたのである。

心中重井簡のこの文は、思ひを心に含み苦しむといふに孕をいひかけたのである。
はらみつげ 戀が積りて穂に現はれて、蕾が孕むはらみつげ(釋迦)
〔波羅密華〕波羅密華の花。波羅密華は東印度原産の常綠喬木で、高さ三丈餘に達し、葉は倒卵形の金邊葉で互生し、花は小形で數多相集つて楕圓形をなし、楕圓形の果實を結び食用となる、その心材を黄色の染料として僧衣を染めるに使用す。巢林字のこの文、種・孕む、波羅密華と、且の頭韻法の文飾である。
*はらもんわろ 四方を尻付たり娑羅門王とも謂つし(鏡殿天皇) 韋駄天・娑羅門天・鍾馗大臣・獅子王の荒れたる姿もかくやらん(門田八島)
〔婆羅門王〕娑羅門天ともいふ。梵語 Bodhi-muni で、天地創造の神で諸神の王様であつたが、佛護神となつて梵天王といふ。梵天を見よ。

はらや つげの小櫛の鬢水と、涙はらはらばらやに落す露の身の、最期たしなむ夕化粧(關八州)
みづかねのかす即ち水銀粉に明礬を和して作り、昔の白粉である。日本書紀通鑑卷三十五に「水銀粉、和名波良夜、俗云伊勢於志呂伊、出勢州射和爲精品」。西郷の胸算用巻一、伊勢海老は春の紅葉の條に「鹽節一進、はらや一箱、折木の鹿」。

はらを 連立てば日に立つと、三人ばらばらばら緒の雪駄、足音なし(こそこそと(虎が唇))
〔散骨細い〕緒を數條集めて作った鼻緒。散骨の雪駄は元祿頃流行したもので、好色一代男・卷三にも、「ばら緒の雪駄音高く」と見えてゐる。

*はり 五人張りに十五束からりと番ひ引絞(津月三郎)
〔張引〕何人張といふはその人数にて張られる強弓をいふ。「五人張の弓とは、四人がかりて弓を握め、一人が弦をかけて張る強弓をいふ。」
*はりくち 天秤針口輕めなし(抱怨)
〔針口〕天秤の中央支柱の上にある針で、輕重の平均を見るに用ひるもの。和漢三才圖會卷十五、藝器部「天平の條に「天平今云針口。法馬今三分調。即權標之本也。衡之左右設一盤、而法馬與物相秤輕重、針口平均不離輕爲準、見法馬負知輕等目」。

はりこくら 腕や厲の力は御侍にも負け申さぬ、はりこくら踏みこらば此膝骨の碎くるまで(百日曾我)
ぶちあひ(撲合)。「はりしは張て人を打つていふ。」「こくら」は「踏みこくら」「飛びこくら」「かけこくら」などいふ。「こくら」であつて、「こくら」(事)略である。「はりこくら」は張事競で、即ち撲合のことをいふ。
針ぼうじよ 片時休まぬ商賣も、見ん事母親養うて、其の間に針ぼうじよ(持統天皇)
〔針幫助〕針仕事即ち縫製の手傳ひ。

はりまなげ 櫓にかけてはりまなげ、あぐら團扇や扇の芝に(雪女)
相撲四十八手の一。敵手に二本差された時、其利手を逆に越して敵手の袖を引き、審判かるところで逆を打つていふ。
*はる 瀬多の久三がどうの時百切はつて見たれば(舟波與作) 年季のこの玉をたつた三百の抵當に張つて、既にどうへ取らるる處を(大織冠)
〔張〕張引の義。博奕にて物を賭けるをいふ。舟波與作に「三まいせし七つぢやと二文張りをつた」とある「張り」は掘つて居る意である。「とまらせし」を見よ。

*はるなご 裏白ゆづり葉ごまめでござんせの春永に、いよしもかはらぬ御見まで(夕霧)
〔春永〕春の日の長き。永日。俳諧時記茶草に「春永。初春に三番の季も長きをさしていふ。」
*はるび 冬海は潮疾し、はるびが延びて見えざふぞ、深海になつて鞍かやさんしめ給はばかと呼はれば(盛明寺殿)
「はらおび」(腹帯)を約めて「はるび」と云ひ、轉じて「はるび」といふ。馬の腹にまはして鞍をしめつける帯。和名抄に「襪」を「はらおび」とよみ、新撰字鏡に「襪」を「はらおび」とよみ、易林本節用集に「腹帯」を「はるび」とよんである。この文は佐佐木義原字治川先師を應用了こといふまでもない。

*はれい 駕籠が借りたに豊後の國まで乗せてなも、はれいでもない、爰は津の國池田、豊後までは海の上が(二百里(百合若))
感動詞。ああ。播守部編、俗語書あゝの條下に「國」とありて今もアア、ハレ、マア、とうち「はれ」とあり。「はれ」とでもない「は、ああとんでもない」の意。

はれい ヤアこれなる下郎めば、かかるはれいの庭なるに頬被は緩怠なり(出世景清)
「はれ」(啼)に「い」の増加した語。元祿時代の

はれい ヤアこれなる下郎めば、かかるはれいの庭なるに頬被は緩怠なり(出世景清)
「はれ」(啼)に「い」の増加した語。元祿時代の

武士の間には言葉に物體をつけて、かかる言ひ方をしたものである。「侍て」といふを「侍てら」と「し」を奪かして「ふ」などもこの類に屬する言ひ方である。

サア頼みを取つてはもう
おれぬ、わざぐれやけちやばれて
出て忍男の構があると、とんと言
うて捨ててか(薩摩歌)

秘密の暴露するをいふ。現今も岐阜縣加茂郡
書白川村地方にて、「ばれ」を露顯する意に
用ふ。和訓栞に「ばれ」俗語に事ばれたなど
といふは破離の轉訛なりとへり、露顯の意
に「ふ」も同じ。

はん 嘘ぢやなかばん聞かつしや
祭(博多) 九月の七日九日は氏神殿
の祭、本踊いる唐子踊いろ見事な
ことばん(博多) 諸白をいつかけ
陸摩二才、ふとが男であつたば
ん(博多)

「だ」ちやといふ程の意にいふ。即ち「なか
ばんは」無しのだ。「ことばんは」ことこ
「つたばんは」あつたのだの意である。こ
の語現今も佐賀長崎地方で用ひてゐる。蓋し
「ばん」の轉訛であらう。

*はんがい 夏(の)物は半がいに 繻紵
が一枚無さうな(丹波興作) 手
手に背負ふ葛籠・ばんがい。錢箱・櫛
箱(開八州)

「はんがけ」半掛の轉。兩掛(天秤棒の兩端
に掛け、衣服などを入れて擔ふ葛籠)の片方
をいふ。

はんかうびたひ 北國訛りのはんか
うびたひ(川中島) はな
「半頭額」半頭または半頭割ともいふ。「か
う」は頭と書けど髪(の音便)。嬉遊笑覽卷一

はれるーばんくわん

下、容儀の條に、「此男立の悪風俗を室町將軍
の時より盛なり、其醜態甚まざる異風して
半頭などもあり、これは若き武士も多く有
て古態に見ゆ、常の奴奴太まの中程に横に毛
を剃殘して俗に是を障子と云、この障子のこ
れ半頭なり、今も武家の趣き者に此障子の髪を
剃て同じ長きにし、結込は常の様也、是を短
く切てはんかうと名付るもの有り、又半かう
割とも云。」

はんがくによ たとへば異國の石籠
夫人・我朝の板垣女の(力もよしや
義秀が母の力を手覺の(五人兄弟)
〔板垣女〕城塞國の女、強力で射を能くす。建
仁元年佐佐木盛綱に攻められ、克く戦つたが
終に虜となつて鎌倉に至り、後に淺利義遠の
妻となつたといふ。板垣女は醜女であつた由
傳ふれど、梅園日記には醜女でない由記して
ある。

*はんがしら この御家中にて番頭
伊達(の)與作(丹波興作)
〔番頭〕近習頭をいふ。主君の側近く勤める者
の頭役である。

*はんき 東三條兼家公萬機を攝政
し(開八州) 五天竺の君として萬機
を御心に任せ給へども(霧迦)
〔萬機〕萬端の政務。尙書、皇陶註に、「競競業
業、一日萬機」とありて秦沈の註に、「機微
也、易曰惟機也、故能成三天下之務」。

半九郎 昨日はわしが氣晴しとして、
父様と半四郎の心中狂言見たれど
も、餘の事は耳へも入らず、半
九郎・お染の最期の臺詞此方の胸
に皆こたへ、二人死ぬなら死にな
いが、こんな様死んで下さりよ

か(卯月紅葉)
半九郎お染のことが、實事蹟に見聞知の
所説として記してある體載を述べれば、若侍
菊地半九郎が京都二條城普請奉行の附人と
て江戸から上り、半在中に祇園の茶屋娘お染
と江戸から重なり、半在中公濟んで江戸に歸
らねばならぬことになつたので、兩人互に別
れを悲しみ、遂に寛永三年九月二十九日の夜
鳥渡山で情死したといふ。但し卯月紅葉のこ
こに(へるは、寶永三年の夏、道頓堀の岩井
半四郎座にて上演した半九郎・お染の心中狂
言をいうたのである。これは前述の事情を更
に脚色したものである。その狂言の梗概は、
半九郎とお染といふ若い男女が情交密であつ
た。或日半九郎がお染を腹藏の女であるとい
つて、己が兄の徳藏太助の内に引入れて共
に宿つたが、聽て孫太郎は兩人の關係を嗅付
けて怒り、お染を戸外に放逐した。半九郎そ
の夜家を忍出で、お染と共に無常の山に行つ
て情死した。この時浮氣男の軍屋七兵衛が茶
屋女まつと心にもあらぬ情死を約して無常の
山に来て、半九郎お染の情死を見て俄に怖
ろぢらうとも見ふ。

*はんくわい 焚噺が力ば楚兵七十
萬の鋒先を挫き(三國志) 母の衣を
賜はるること焚噺が母衣の因縁、 焚
敵を討たん瑞相と(五人兄弟) 焚
噺流は珍しからず、門を破る
は日本の朝比奈流を見よやと
て(完綱島)(國體誌)

〔焚噺〕漢高祖の臣である。もと狗を屠るを業
とした者、剛勇である。高祖が楚の項羽と鴻
門に會した時、項羽を抜いて舞ひつづ隙を
狙つて高祖を撃殺さうとした。焚噺屋外にあ
つて主君の急を聞き、乃ち鐵盾を持ち宮内に
入らうとした。門衛の士が噺を止め、噺即ち

衛士を撞倒して入り帳下に立つ。高祖は噺が
来てくれ九た爲に、虎口を免れて事なきを得
た。〔楚兵七十萬は、史記項羽本紀に「楚二
十萬、項羽兵四十萬在新豐鴻門」と見え
てゐる。〕
曾我五兄弟のこの文は、和漢三才圖會
卷之二十、兵器類、はるの條に「母衣始手漢
樊噺、出陳時母脫、衣爲護身。噺每戰被衣
於鐵、奮勇殊技、其後馳驅武用之」と
見えたる。

*焚噺流とは、焚噺が門衛を撞倒して鴻門の
宮内に入った勇烈な動作についていうたので
ある。史記項羽本紀に「噺即帶劍撞盾入
軍門、交戟之衛士欲止不內、焚噺刺其盾、
以撞衛士、仆地、破圍立、眼目
視項王、頭髮上指、目眦盡張」と見えたる。
心中天網島のこの文は國體語合歌、其立軍
法(九仙)に「焚噺流は珍しからず、門を破る
は日本の朝比奈流を見よやとて、……左龍虎
右龍虎討取つて、難なく過ぐる月日の開や、
とあるを道具屋節(だうぐや)を見とて語つ
たのである。

はんくわん 屋形の廻りを伴衆と立
休らひてぞうががひける(用明天皇)
〔伴衆〕閑あつて樂しむ貌。詩經大雅に「伴
衆游笑、優游爾休矣」。

はんくわん 人に心をつけ顔に、戻
られもせず般造と編笠傾けおはせ
し(孕常盤)
〔般造〕進み難き貌。禮記に、「般造
而遊」。

*ばれんくわん ヤア無禮者浪藉者、下
ばれんくわんとざわめけば、返答もせず
盤桓たり(開八州)
〔盤桓〕進み難き貌。般造、易屯卦に、「初九
盤桓、利居貞、」とありて本義に「盤桓、難
進之貌」と見えたる。

はんげ 同じ處に當歸まで、はんげはんげと季を重ね(薩摩歌)

「半夏」からすびしやくともいひ、畑地に自生する雜草で、地下に球形の塊莖を有し、その塊莖から二莖を出し、莖頂に三小葉をつく、夏季別に莖を出して、その莖の帶黄紫色苞内に雄花雌花を穂状に綴る。この種類に屬するものははんげには有毒草本である。

はんげしやう 芙蓉・林檎・長春・三白草(振袖始)



【うやげんは】

はんげしやう 島田亂れてはらばらう、縛られし手の冷たさは(大經師)

「半夏生」夏至後十一日に當る。舊日講釋に「夏の中分にて半夏といへる薄草生する節なり、この日までに農夫は田を植治むるなり、この日を過ぎて植うればみぢのらすといへり、この文は大經師に據るる舊上語を用ひ、【うやげん】の半夏生に【うやげん】にかはる假註の意をいひかけたのである。

はんごんかう 今燒香に立つ煙反魂香と煙ゆるかや(反魂香)くゆる煙は反魂香、あしたは雲となる(西玉母) 梅檀木や・はんごん樹常盤の森の初紅葉(松風)

「反魂香」亡き人の魂魄を招き返すといふ靈香である。謡曲「花笠」に「李夫人の面影をしはらへくこに招くべし」とて、九華帳の中にして反魂香を燒き給ふ、夜ふけ人しづまり風すさまじく月歌なるに、それかと思ふ面影の有るか無きかにかけるへば。

「反魂香」は反魂香を採る樹である。十州記に「磐龍湖在西湖中州、此土有二大樹、似此國楓、名曰反魂樹、枝取其皮、於玉釜中煮之、取汁、更以微火煎乾之、如黑錫、今可丸三、火驚精膏、亦名靈藥丸矣。

はんざふ はんざふ大王の後胤かつらゆひの親王の末孫(用明天皇)

「半祖」古くは「はんざふ」三つ。養正後名類聚抄に、「暹。波渡佐布、或説云、有兩半祖、其内、半在其次外、故呼爲半祖也、柄中有道、可以注水之器也上見えてある。體の小さな半祖といふは其物の轉じたのである。體無れに用ふる耳韻。「はんざふ大王」とは、久馬平が稱號なるによつて、稱號に據ある故論な筆をつかつたのである(范增といふ人名、大王といふ語が史記・項羽本紀の中に多く見えてるので、殊に滑稽である)。

はんしき 琵琶取出し盤渉を平調にしらべか(顯九)

「盤渉」十二律の一。この文は盤渉調の略。盤渉の音を官音(西洋音)として音階を構成するもの。はんしやう 番匠の棟梁木工の頭修理の頭(出世景清) 番匠箱を押し、大鑿、手斧、鋸、鑿、鉋、屈、竟一の手裏劍と、おつ取り打立つれば(出世景清)

はんじやう 茶の湯・盤上・打囃子・男の發(一つでも)(歌念佛)

「萬乘」天子をいふ。乘は兵車をいふ、天子は兵車萬を出すと云ふ意より天子をいふ。孟子・梁惠王上篇に「萬乘之國」とありて趙註に「萬乘、兵車萬乘、謂天子也。

はんしらう 昨日本が私か氣晴しとて、父様と半四郎の心中狂言見たれども(卯月紅葉)

「半四郎」若井半四郎のこと、いはいはあのはんしらうを見よ。半四郎の心中狂言とは、大道頓地、岩井半四郎座で寛永三年夏上演した鳥部山中狂言をいうたのである。「はんくらうしらう」を見よ。

はんぞう はんぞうを見よ。

はんた 辻の番犬が夢食ふ、ばく勞町をぞ歸りける(徒懸) どんと打つたる太鼓の番犬(反魂香) 町の番太あわただしく、何事やらん御詮議とて新田殿・海野殿御出なりと觸れありく(百日曾我)

はんてん 名をばんてんに輝さんと思ふ根性さげもせて(西玉母) されば戰場に先なかけ名をばんてんにあぐる者(大掛物)



【太番】

はんどう 弓取の言ひも習はぬ駕籠昇詞、成り下りたり。だり。はんどう、いつかのがれん。きり。がれん(西玉母) そく・ばんどうに名の高きろうじ六藏(田村將軍)

はんじやうめ 「女中のすきの青梅云云」を見よ。

はんじやうめ 「女中のすきの青梅云云」を見よ。

はんじやうめ 「女中のすきの青梅云云」を見よ。

はんじやうめ 「女中のすきの青梅云云」を見よ。

はんじやうめ 「女中のすきの青梅云云」を見よ。

捐資節中、恩晴中道絶へと見えてゐる。此曲・班女に、吉田少將と花子との上に、扇の事を作つてゐるのも、班婕妤の秋扇の故事に據つたものである。開の扇は班女が云々を見よ。
はんび 坂田の公時兼の役、半臂に腹巻・烏帽子懸けし(開八州)

〔半臂〕古昔、束帯の時、袖と下駄との間に著る兩袖のない短い衣。遷任後名類聚抄に「半臂。衣名也、按釋名有半袖、其袂半袖而施袖也、後世半臂始其遺、事物紀原實錄曰、隋大業中内官多服半臂、除却長袖也、唐高宗減其袖、謂之半臂、今背子也。」
はんび 髭籠に籠めし祇園坊、はんぶ御最負、弓も引き方靱の客といふもあり(酒香壺)

〔半分〕一寸の半分(一寸)の義で、勳銀五分なる下位の遊女をいひ、この贅笑婦をわけても稱す。「わけを見よ」。
はんべ 吳服屋の手代半兵衛は彼の池田屋の小菊にたんと金入なれば(水朝日)

〔半兵衛〕傳奇作書附録中の巻、心中情死人名録の中に、小菊半兵衛の名が載せてある。蓋し吳服屋の手代半兵衛は池田屋の遊女小菊と馴染み、主家の呉服物を取出して費用に充て、情交を續けてゐたが身の名どころなきに至つて、遂に相共に死に伏して情死した者である。
はんや 引かれ惱まされたわいなしく、ばんやの如くなりたるを引起して、兩腕ぐつと引抜き(唐船齋)

〔莖花〕鶯帯地方に産し、木綿科に屬する木、高さ數丈に達し、若き莖は刺毛を有し、葉は線狀披瀝をなし五筋の小葉より成り、花は白色で、長形の果實を結び、その中に莖毛あれど、この莖毛は絲を紡ぐに適しなからずである。
はんび 東山の大字

専ら布團の中などに入れる。「はんやの如くなる」とは、身體甚しく疲勞して髪毛の如く手ごたへ無くなるをいひ、井原西鶴撰日本永代藏巻四、祈る印の神の折敷の條に「奥の寢間に入りて重ね蒲團釣夜者、はんやの栞枕に身がふそはく。和訓栞に「はんや。莖花をいふ發語なり、云云」。
はんやみやうり 佛神三寶・番屋冥利、何事も隠さず勿論他言致すまい(扇八景)

〔番屋冥利〕番屋者のいふ自誓の詞。「けいせちみやうが」の條を見よ。
ひ

ひ 非の入りさうな事どもを言ひくろめたる情のほど(安殿詞) 大概ひの入りぬ程の御用の間には合はせませう(鐘權三) 小松殿さへひを入れ給はぬことを、田尻文官の和主理が嘲るは(何事ぞ)(五人兄弟)

〔非〕理ならぬこと。疏。非難。淮南子に「蓬伯玉五十而知四十九年非」。
ひあふぎ 縦・南天に小手鞠に、いとし男とひあふぎ

〔射干〕草の名。葉は菖蒲に似て並花の形のやうである。花



は黄色で濃色の斑點がある。この文は「射干」に「日に逢ふをいひかけたのである」。
ひうち 冬編笠も垢張りて、紙子の火打膝の皿、風吹き凌ぐ忍ぶ草(夕露)

〔火打紙子〕などの袖の附根の腋下の所に縫ひ附ける火打膝の形したる布切れをいふ。この文は、火打膝と同じ頭語をいひつづけたのである。細伽名題紙衣(元文三年刊)に、「今著てある破れ紙子の古火打、うたれど向脇から火がふり」。「膝の皿」をも見よ。
ひがひ 彼のひが、いすな小男をおのれが大きなくばびらでようもようも蹈みをつたな(曾根崎)

〔ひがへす〕「ひがやす」といふ。捜せ細つて弱弱しきをいふ。人を其姿によつて蟲または魚などに譬へていふ語が往々ある。「ひがらす」といふ語も捜せて見える魚の名「ひがいら」から出たものであらう。山崎美成編・海録巻十九に「ヒガイスと云ふ詞。波海魚譜云、ヒガイス、漢名未だ詳ならず。鯨魚の類なり(云云)(頭書、カマツカ、一名タケラ、スナ)肉性味アキ、ダンキボウ、又同名鯨魚なり」肉性味鯨魚に同じ、食法は又同、其形瘦て骨高きを以て、土俗の謔に病人をヒガイスと云、この魚譜は渡邊暎輔作なり。馬守部の俗語考に「ヒガイスと云ふ」。觀みたる小兒などをヒガイスと云ふ。
ひがきづくり 沖に何待つ檣垣造り十四五反の廻船に、船頭舟子は襖袍着て(博多)

〔檣垣造〕兩段に檣垣を組立てた大船をいふ。和漢船用集巻四に「檣垣。攝州大坂廻船問屋の仲間船を云、六七百石以上皆大船也、垣立の筋を檣垣とする故の名なり、今檣垣と呼て舟舟の名とす、すべて大廻し荷物を積むといへども、多く酒樽油桶類を積むゆゑ舟舟と

云、是又舟舟の一法也」。
ひかけ ひかけの師匠を重んじて、半里餘を夫婦づれ夜な夜な見舞ふぞ殊勝なる(反魂香) 日蔭者の曾我が姉御勤氣者の末などと(會稽山)

〔日蔭〕世を擇りしめて居ること。零落して籠居すること。ときめくこと。反對。
ひがしやか 氣立の好いひがしやかせぬ太夫を頼む(酒香壺) 心底が語りたまふ傍へ寄れば、ひがしやかと拗言のあるでう、安堂寺町とは何事ぢや(今宮) 好い男さへ稀なれば、少しよめなる女房のひがしやかぶるは科ならず(薩摩歌)

〔ひんびんと物さる〕。つんつん。按ずるに畫言字考節用集に「閃閃にヒカヒカ」ヒラヒラの兩條に振假名を附けてあるやうに「ひがしやか」とも「ひらしやら」(を見よ)ともなつた語であらう。
ひがしやまどの 師匠市之進一流は東山殿より嫡傳、一子相傳の大事なれば(鐘權三)

〔東山殿〕足利將軍義隆をいふ。義政が茶道に堪能であつたことは人の知る所である。
東山の大大文字 毎年七月十六日東山の大大文字、都では珍しからず(開八州)

毎年七月十六日東山如意が獄の半腹に大の字に薪を積み、日没を待つて之を焚いたものである。黒川道徳撰・日本紀事(延寶年中成)七月十六日の條に「今夜東山淨土寺山寺以新點大文字、此字畫非凡筆筆之所及也、故一録室町家樂舞日爲之遊樂之觀也景三之所稱筆通爲之當面、依之云」相國寺權川景三之所稱筆